

---

# 人類の・・・ ~僕のやり方~

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人類の・・・　　く僕のやり方

### 【Nコード】

N8824C

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

彼の名前は村雨時雨。桜舞い散る世界に住んでいる夢見る高校生である。彼が目覚めたとき、彼の物語が始まる・・・はずである。

## 第一話：舞い散る桜の元で舞う待ち人（前書き）

く作者との約束く小説を読むときは暗いところで読まずに明るいところで見ましょう！

## 第一話：舞い散る桜の元で舞う待ち人

奴が来る

私の“能力”を奪い去った奴が来る

私をここに閉じ込めた男の息子が来る

この時を待っていた

私を閉じ込めた男の息子の実力、この私とその目で確かめる

………それまで、私はここで舞っていたよう。桜が舞い散る、この場所です………

一、

僕の名前は村雨時雨<sup>むらさめしぐれ</sup>・・・桜吹雪が舞い散る世界に住んでいる。夢は“人類の敵”になることなのだが、それを実現させるために“悪の組織”を創立したいと思っている。“人類の敵”がどのようなものなのか、まだわからないが創立して考えればいいだろう。だが、今はそんなことより大変なことが起こった。

「……、どこだろう？」

目が覚めたら一つの港に倒れていた。周りには僕が所持しているバッグや旅行鞆が置かれている。別に記憶喪失にも何にもなっていないのだが、この状況はどうしたものだろうか？もしかして、悪の組織に僕が捕まったのか？おいおい、冗談きついわ……

「あゝ生徒の皆さんは至急、島の中央にある学校に来てください」

港の近くでそんなことを言っている一人の男性を発見した。ジャージ、胸元に笛・・・そして、角刈り・・・これは間違いない  
「体育の先生」に違いないだろう。これ以外、僕の頭の中での  
「体育の先生」というイメージはない。

「あの、すみません！」

「どうした？えっと、お前は・・・村雨だったか？」

「はい、でも・・・ここはどこなんですか？」

「あゝなるほど、やっぱりこういう奴がいるんだな・・・また拉致か？」

やれやれといった様子でため息を吐くと笛を吹いた。

「はいはい！何ですかあ？」

「村雨のお手伝いさん、事情を察していない人物だったぞ。こいつを・・・」

遠くに見える学校を指差す。

「・・・学校につれてってくれ。俺はまだ他の連中を誘導しないと  
いけないからな」

そういつて僕の背中を思いつきり押して他にもいた人たちに指示  
を飛ばし始める。

「いたた・・・あの人、一体全体僕に何の恨みがあるんだ？」

「それはですね、こんなに可愛い私に案内をしてもらえるのをひが  
んでいるのでしょう」

漆黒のスーツ姿の女の人はそういつてにこりと僕に微笑みかけて  
くる。

「・・・・・・・・」

「ありや？反応薄いですねえ私、そんなに可愛くないですか？や  
っぱり、メイド姿のほうがもてますかね？いえ、萌えますかね？」

「そんなことはどうでもいいので、この状況を僕に説明してくれま  
せんか？」

「おっと、そうでしたね」

こほんとせきをして彼女は真剣な顔をして僕のほうを見る。

「……この度は『長決め選手権第一回戦』にご出場、おめでとうございます。失礼ながら、村雨時雨様の日々の日常、实力などを見定めさせてもらいました結果、見事“水の一族”の代表選手として選ばれました」

そういつて頭を下げる女性。僕は首を傾げるばかりだ。

「え……そんなの聞いたことがないんだけど……」

「そうでしょう。実際のところは時期当主や、次点で能力が高いものたちがこの島に招かれます。二十歳以下の人たちが主にここには集められますね。村雨様は特例だと思われます。さて、他に、何か聞きたいことはありませんか？」

「……あの、僕は今帰れないんですか？」

今度の英語の時間では和訳がある！僕、当てられてたんだよなあ・

・

「今は無理ですね。先ほど、乗られてきた船が完璧に沈んだようで……まあ、ここでの生活はそこまで苦労しないと思いますし、何かありましたら私に言ってください。あ、ちなみに私は村雨時雨様が島にいる間村雨様を個人的にお世話するお世話係です。名前は美奈といいます。よろしくお願いしますね？」

「あ、はい……」

荷物を持ってもらったまま、僕と美奈さんは共に学校へと向かったのだった。しかし、まあ、おかしいものがあるもんだなあ……“一族”を束ねている“当主”になる予定だったのは僕の妹だ。実力だって僕より上のはずなのだが……なんでだろうか？

向かった先の学校は大きかった。いや、大きすぎた。集められた人数はこれの半分でも充分の人数だし、この島にいるほかの先生方もすべてを集めても両手でことが足りるだろう。

「さ、村雨様のお部屋はこちらです。どうぞ、ついてきてください

ね」

学校にはいつて今度は地下へと向かう。地下にはどうやら居住区があるようだ。地下に進むことに僕は何かを感じ始めていた。

「・・・なんか寒くありません？」

「ええ、地下ですから・・・それと、噂ではこの地には守り神としてどこかの“一族”の

当主の墓があるそうですよ？この時期にいつもこのようなことをしていますのもしかしたら怒っているのかもしれませんが、ちよつと驚かしてやろうと思っただけかもしれませんね　ああ、夜中に肝試しを行っても構いませんよ？毎年、そのようなことをして行方不明者が出ますからねえ　おばけって実際にいるんでしょうか？」  
そこは笑って言うところじゃないだろうと思いつつ、僕は美奈さんの後ろを追いかけていく。

「それとですね、この島には立ち入ってはいけないといわれている場所が数箇所あります。間違つて入ってしまったとしても助けることが出来ないので気をつけてください。先ほどの話と少々被るところがあるかもしれませんが、当主の墓があるのは立ち入り禁止区域のどこかだそうです。あ、学校内にも勿論ありますので気をつけてくださいね？ちなみに、私たちが向かう村雨様のお部屋の隣も既に立ち入り禁止区域ですからね」

うわっ、かなり嫌なところにとめられてしまうなあ・・・しかも、なんでそこまでうれしそうなんですか？僕としては強制拉致で既に参っているんですが・・・

「さて、ここです」

いきなり美奈さんが止まったので僕は前につんのめりながらも自分の部屋を見る。今まで見てきたように廊下の左右に取り付けられている扉と何の代わりもない。別に僕の隣が既に壁だったりしないし、まだまだ奥には部屋だってあるし、人の気配もする。

「ここから先は立ち入らないほうが身のためですので、先に申ししておきますね。どうしてもというときは私を連れて行ってください。」

危険ですからね・・・わかりました？」

「少しかだけ真剣そうな表情を見せて僕にそう告げ、返事を待っているようだった。」

「・・・わかりました。でも、何がこの先に・・・？」

「知ることはいいことです。ですが、勉強をするためには時間を犠牲にしなければなりません・・・この先にあることはもしかしたら時間以外のものを犠牲にしなければならないかもしれませんよ？」

「そういつて微笑む。だが、その顔がぜんぜん笑っていないかったりしたものだから僕は」

「あゝそうなんですか・・・じゃ、お部屋に入っていていいですか？」

「とたずねて勝手に入ったのだった。ちよつと疲れたので部屋の中で休もうと思ったのだが・・・世の中とは残酷なものだった。いや、意外と僕にだけ厳しいのかもしれない・・・これって僕の被害妄想？」

「やあ、時雨君」

「剣治！？」

僕の目の前に現れたのは僕の学校の親友である剣山剣治つるぎやまけんじだった。

少数の“一族”の次期当主といわれており、その実力は郡を抜いていた。生徒会長を現在やっており、生徒中心の学校運営を目指している。そういえば、来年には当主になるっていつてたかなあ？まあ、剣治の実力ならここにいってもおかしくないのだが・・・

「何で僕の部屋にいるの！」

「心配しないでくれ。私は別に君の趣味が実は“年上のお姉さん”だったとは言いふらさないさ」

「そういつて僕の後ろに立っている美奈さんを見ている。」

「え、この人はお手伝いさんだよ？剣治にもいるでしょ？」

「まあ、先ほどまでいたな。だが、私のお手伝いさんは猿だったぞ？」

「剣治の目は」

「なぜだ？何故この私に君のようなお手伝いさんがついてくれないのだ？」と語っていた。その視線を美奈さんは見事に理解したらし



い。僕から一步前へ出るとこ本と咳をした。気がつけばメイド服になっている。いつ着替えたのだろうか？

「・・・一言で申し上げますと、今までとってきた行動が一番よいもののみ、お手伝いさんなど必要ないと考えられていますのでこの度はつけられなかったのでしょうか。しかしながら剣山様、あなたのお部屋は校長室の隣だと思われましたが？」

「うん、その通り・・・私の部屋は一階の校長室の隣。だけど、まあ・・・知り合いがいたって聞いてここまでやってきたのさ」

僕になにやら目配せをした。その意味をきちんと理解できたかわからないが、僕は剣治が何をしたいのか、僕にどうして欲しいのか僕なりに理解した。

「じゃ、私は時雨君の顔を見に來ただけだからおいとまさせてもらいましょう。じゃあね、時雨君」

剣治はそのまま去っていき、僕と美奈さんが残された。

「美奈さん、ここから一番近いトイレはどこかな？」

「トイレですか？部屋に備え付けられていますか？」

「うーん、ここは学校なんだし、共同のトイレがいいんだけど・・・どこかな？」

「一階にあります。お連れしましょうか？」

「はい、お願いします」

僕らは荷物を置いてそのまま一階へと向かったのだった。

一階の男子トイレを見つけ、僕は美奈さんに外で待ってもらうことにして中に入る。

「やあ、来たね？」

そこには剣治があり、先に用を足しているようだった。

「どうかしたの？」

「私なりに思っただが・・・ここ、なんかいるぞ？しかも、動いている・・・いや、地下で蠢いている。まるで、何かを求めるようにさ？」

シリアスな雰囲気<sup>が</sup>立ち込めるなか、用を足している剣治の前のほうからも煙<sup>が</sup>立ち込める。おいおい、雰囲気<sup>が</sup>台無しだよ・・・  
と思った僕<sup>だ</sup>ったのだが、とりあえず話を聞くために外の美奈さんに「大をしますね」と伝えておいたのを幸運に思った。

## 第一話：舞い散る桜の元で舞う待ち人（後書き）

さて、以前短編でかきました小説なのですが、非常に間をあけてしまつて申し訳なく思っています。ちよつとわかりづらいつて人もいるかと思いますが、これからゆつくりと物語は動いていきますので長い目で見てもらいたいです。では、これからよろしくお願いしたいと思います。

## 第二話：待ち人は刃を持って人を待つ（前書き）

「作者とのお約束」寝る前には歯磨きをしましょう。あと、小説を読んで何か感想があつたら感想をかきましょう。作者すべてがそれを望んでいます。

## 第二話：待ち人は刃を持って人を待つ

奴が来た

奴は私の近くを通った

だが、まだ気がついていないようだ

こんなにも近くにいるのに……

こんなにも私は気がついて欲しいのに……

……だが、奴が気がついたそのときに私は奴と刃を交えなければいけないだろう……

二、

剣治の目は真剣そのものだった。だが、場所が場所だけになんたか力が入らない。

「まあ、私もこっちに来てまだ間もない。大体次期当主としての実力があるものだけがここにくるということなのに君が来ることがよくわからないのだが……私たちの身に危険が及ばないようにがんばることだろうね。どうにも、納得いかないことがあるから……・時雨君、君も何か気がついたらここに来てくれ。じゃ、僕は先に出去せてもらうよ」

一方的に話して剣治はトイレから出て行ってしまった。残された僕は何もせずに手だけを洗って外に出る。外にはジト目でこちらを見てくる美奈さんが立っていた。

「……遅かったですね？」

「ま、まあ……結構がんばって生み出しましたからね？今頃僕の

生み出したものは旅をしているんじゃないでしょうか？下水道あたりに・・・いえ、ここは島ですから海水浴？」

愛想笑いを浮かべて剣治のことには触れないようにする。しかし・・・このお手伝いさんは本当にただの“お手伝いさん”なのだろうか？それにしても常人とは違う視線を感じるのだが？

「じゃ、学校は明日からありますので、今日のところは部屋に戻ってください。あ、夜は外に出ないようにしてくださいね？では、おやすみなさい」

「・・・僕の隣のベッド寝ているあなたのお部屋はどこですか？」夕食は部屋で簡単なものを取ってそれで終わり。そして、そのまま美奈さんの言われるとおりにお風呂にはいつて次は寝る準備をしたのだが、彼女もいきなりパジャマになった。

「いえ、部屋数が足りないのでこれは妥当な線かと・・・何かおかしいところがありますか？あ、このパジャマでしょうか？」

可愛いくまのプリントされているピンクのパジャマを伸ばして見せて首をかしげる。

「・・・やはり、少しばかり少女趣味だったでしょうか？」

「いや、パジャマじゃなくて・・・あゝもういいです。静かに寝てください」

考えていても埒が明かないし、意外とこの人には注意を払っておいたほうがよさそうだったので僕も自分のベッドにもぐりこむ。電気も消されて辺りには静寂が訪れる。

「・・・」

眠ることができないのはなぜだろうか？隣に美奈さんがいるからか？ああ、羊を数えれば僕は眠ることが出来るのではないのだろうか？羊が一匹・・・羊が二匹・・・ぐっ

僕が立っているところは闇だ。目の前にあるものは大きな扉。ここはこの学校の地下二階・・・なぜだろう？ここがどこだかすぐ

にわかってしまった。

僕は誰かに話しかける。

「……………あなたが……………」

相手は答えない。相手が持っているものは僕らの“一族”で自らが作り出す、水の刃だった。切れ味ではなく、激流で相手を引きちぎるような感じに使うものだ。相手はそれを僕に向けた。

「村雨様？村雨時雨様？」

「……………あ、うん？」

目が覚める。なにやら意外とあっさりとした夢を見たものだ。・  
・ 思い、目を開けるとそこには見ず知らずの女性がいた。あ、そういえばここはいつもと違う場所なのだ。それをようやく頭の中で思い出して僕は返事をする。

「あ、美奈さん……………」

「やっと起きましたか？今日は入学式ですので、早く起きてくださいね？この学校での制服は先ほど届きましたのでハンガーにかけています。どうぞ、着替えてください」

にこにことして僕を起こしてくれる。まあ、こういう生活に一時期はあこがれてもみたものだ。あ……………悪の組織を立ち上げたときにはこういう人を入れてもいいかもしれない。あ……………僕専属のメイドか……………うへっ……………あゝ朝っぱらから何考えてるんだろ？

朝食も簡単なものをとって部屋の外に出る。地下から一階へと向かうときに感じた嫌な感じは今日は感じず、僕はそのまま体育館と思われる場所へと向かった。当然、先導してくれているのは美奈さんである。その途中、数人の人を見かけた。

「……………あの方たちは村雨様のライバルです。昨日話しましたが、

彼らも相当な実力者ですので気をつけてください。中には友達面で近づいてきて不意打ちを食らわせるようなことをしてくる人もいると思われますので念には念を押してください」

美奈さんはそのような人たちに目をくれることもなく、ただ黙々と歩いていたのだった。その後ろを歩いている僕ははたから見たらきっと姉と弟として見られていられるかもしれない。

「・・・あの、美奈さん、聞きたいことがあるんですけど？」

「何でしょう？」

「確かに他の人たちも集められているっていうのは聞いたんですけど・・・具体的にどんなことをするんですか？」

「簡単なことです、皆さんには一ヶ月間生き残ってもらうだけ・・・ああ、きちんとしたルールなどは後で説明しますので、いえ、やはり今ここで私が話すよりも体育館のほうで好調自身が話したほうが理解も早いでしょう。それにいずれ人数は減ると思いますからね」

それっきり、黙ったままで彼女は体育館へと向かったのだった。先ほどよりも歩調を速めたような彼女に僕は一生懸命追いつくように早足になった。

なんてことはない、ただの体育館・・・中に入ったときに感じたことはそんなものだろうか？色々なところが壊れているところを抜かせば、だが・・・

「えーこの度は・・・」

お決まりの台詞を言った後に自称校長先生（推定六十ほどの女性）は話し始めた。僕は話を聞く一方、他の人たちを見る。この世界にどの程度の数の“一族”がいるのか知らないが、とりあえず、見ておくことにした。僕の周りは美奈さんを除くと男ばかりだ。

「・・・ええと、うつんと・・・」

どうやら、ざっと見て男子：女子が6：4のようだ。さっき見たのと変わらないなあやっぱり男子のほうが多いのか・・・と思ったそのとき・・・肩を掴まれた。



「……村雨様、きちんと話を聞いていたのですか？」

「あ、はい……ばっちりです。今の僕は集音声の高いレコーダですよ。」

隣に座っていた美奈さんにそういわれてとっさに嘘をついてしまった。ま、まあ……。どうせ長かった話だ。僕には関係のことのない話しに違いない。

「……では、先ほども言ったと思いますが詳しいルールを一時間後、先ほど君たちに告げた場所で行います。遅刻のないよう、お願いしますね。」

そういわれてみんなが立ったので僕も慌てて立った。

し、しかし……。意外と大変なことになってしまったようだ。ちょうど、聞かなくてもいいと思っていたところでどうやら重要なことを校長先生は言ったらしい。それがどこかわからない……。剣治の姿も見当たらないのでこれは万事休す……。他人が動いたところでそれについていくしかないだろう。僕はそう思って美奈さんと共に自室へと再び戻ったのだった。

「村雨様、入学式はどうでしたか？」

「いや、どうでしたかって……。うーん、あんまり僕らの高校と変わらなかったような……。」

「なるほど、確かに見た目はそうでしょうね。今日中にここにいる人たちは結構減りますよ。これは私の感ではなく、年間行事のようなものですからね。村雨様を信じてますよ。」

そうやって笑う彼女は何か知っているようだ。まあ、元はこの大会？のようなものを運営している側の人間なのだし、知っていて当然なのだろう。

一時間後、僕はルールを教えるという場所を探していた。美奈さんは途中で姿を消してしまい、僕一人で探すハメとなった。まあ、話を聞いていなかった僕が悪いのだし、脱落したって別に構わないだろう……。あゝ家に帰ってゲームでもしたいなあ。

「・・・そんなことより、頼りにしていた剣治の姿を見落としたのは痛いなあ・・・」

途中、剣治を見かけたので話しかけようとしたのだが・・・人の流れに流されてしまった。

その結果、今日の前を歩いているのは二人組の女の子だった。知らない女の子に話しかけるのはどうかと思ったので後をつけることにした。いや、誤解しないでもらいたいのだが、これはしょうがないことなのだ。ここ、はじめてくるところだし、迷子になって脱落なんて恥ずかしい真似を僕はしたくない。つまり、これは正当な行動なのだ。

「うん、僕はこれで正しいんだ！」

心の中で叫んで目の前の二人組を追いかけること、数分。僕はようやく一つのクラスへと入ることができた。ここはどうやら南のほうの校舎らしい・・・

中に入るとほとんど女子だらけだった。

僕は入り口付近でぼさつとしていた。一人の女子が咳を一つして僕の目の前にやってきた。

「・・・男子は北側のクラスでしょう？」

「え・・・本当ですか!？」

「ええ、先ほどの話では『男子は北のクラス、女子は南のクラスに行ってください。』と言ってたわ。ねえ、そうだったでしょ？」

後ろのほうにいる女子たちに尋ねる目の前の女の子。当然のように彼女たちは頷いたのだった。そして、なんだか敵意を僕にむけているようにも見えないでもないなあ・・・何故？

「・・・すみません、間違えました」

僕はそういつて出て行くと損したはずなのになんだか嬉しかった。なぜだろう？やっではいけないことをやってしまったようなこのど

きどき感は？

「待って、君が行ってるほうは西の方角よ？そっちじゃないわよ？」

「あ、そうなんだ・・・」

何をしているのだろうか、僕は・・・どうやら方角もわからないようになっちゃったらしい。そろそろ、いい病院を誰かに教えてもらったほうがよさそうだなあ・・・

「私が教えてあげるわ。まだ、間に合うと思うからね」

そういつて先ほど親切にしてくれた人がまたもやおせっかいを働いてくれたのだった。

## 第二話：待ち人は刃を持って人を待つ（後書き）

前書きでめっちゃくちゃわかったような口を叩いてますが、それは事実だと思っています。さて、連載二回目ですが、まだ話が見えていない人もいるんじゃないかなあと思っていますので先に補足を入れておきます。詳しくはこの話が終わって時雨たちが通っている学校のほうに話を変えてから詳しく書きたいのですが、時雨たちが住んでいる世界は少々変わっています。今のところは何の変哲のないことなのですが、実は、既におかしいところがあるのです！じゃ、順を追って説明していきますので、これからよろしくお願いします。

### 第三話：記憶が話を変えるのか？（前書き）

「作者とのお約束」ケータイ小説を見るときはケータイの料金に注意して目を画面から三十センチほど離して見てね。

### 第三話：記憶が話を変えるのか？

奴は残る

奴は必ず私と再び出会うだろう

この仮面の下に私はいる

今すぐにも正体を明かしたい

明かしたところで覚えてはいないだろう

……だが、覚えていれば話は変わるだろうか……

三、

僕の隣を歩いている彼女の名前は炎宮えんぐう焰華さんだそうのかだ。

「へえ、次期党首じゃないのに選ばれたんだ？そりゃ、すごいねえ？」

「まあ、すごいかどうか知らないけどね・・・何でだろうかと僕は思うよ・・・ここに来る前、どんなことがあったのかさっぱりだし、今気がつけば僕っていつ拉致られたのかわかんないんだ」

「あ、それは・・・村雨君の場合もちょうど夏休みに入っすぐだと思っけど？ちなみに私の場合は学校から出て気がついたら目の前に黒い車が止まってて・・・中から人が出てきて名刺を出されてそれを眺めてたらいつの間にかここに来てたの」

そういつて笑っているのだが、それは充分誘拐だろう・・・この人、今のご時勢がどのようなものかわかっているのだろうか？夜にお外を歩いていたら襲われる世の中だ。

そんな話をしながら歩いていると

「キーン、コーン、カーン、コーン」という音が聞こえてきた。お互いに顔を見合わせて次に手につけている時計を覗き込む。

「・・・あのさあ、今、何時かな？僕の時計さ、気がついたら動いてないんだけど・・・」

「・・・私の時計、どうやら十分遅れてたみたい・・・」

僕らは二人、その場に膝をついた・・・と、同時に・・・先ほどいた方角と、これから行く方向から同時進行で大きな音が聞こえてきた。そうだなあ、例えるなら何かが爆発するような音だった。

「！」

目を見開いて二人してとりあえず先ほどの女の子ばかりの部屋のほうへ取って返すと（男子？ああ、見知らぬ男は後でいいでしょう？）そこには女子がほとんど倒れていた。肩膝ついて生き残っている女の子も一人だけいたのだが・・・そこへ、教室に備え付けられているテレビが勝手についた。

『残り、十人・・・先ほどの攻撃を耐え忍ぶことが出来たのがこのくらいですか？去年の人たちは君たちの二倍はいましたよ？ああ、失格者のことは気にしなくて結構。別に彼女たちは死んでしまったわけじゃない。ちょっと眠ってもらっただけだからね』

画面に映ったのは

「音声、おんり〜」とかかれた文字だけで聞こえてくる声はしゃがれている。ボイスチェンジャー？

「・・・では、残り十人・・・残りの期間を生き抜いてください。ああ、協力はしたほうがいいでしょう。これからあなた方が相手をするのは並大抵の相手ではありません。今回の人数から見えて一定期間を生き抜くのは不可能でしょうから、特別ルールとして二つの場所にたどり着ければそこでこのおふざけは終わりです。がんばってください」

そういつてテレビは完全に沈黙。何も起こらず、とりあえず僕と焰華さんはこの場所での唯一の生存者（失礼、倒れている人は寝てるだけでした）に近づいていく。

「・・・・・・はあ・・・・・・はあ・・・・・・寝るな！寝るな！寝るな！」

突然、そんなことを言い出した。どうやらこの煙を対処するために自分なりに戦っているようだ。その表情は険しく、人を一人殺したときのような表情でもある。

「くるな！くるな！くるな！羊など・・・・・・食べてやる！！」

何を言い出したのか非常に理解しがたいのだが、彼女はきつと必死に頑張っているのだろう。とりあえずここからだしてあげたほうがいいので焰華さんにそのことを伝えたと彼女もうなずいた。

「そうだね、とりあえずここから出たほうがいいようだし・・・・・・村雨君は彼女の右のほうに近づいて・・・・・・そしたら私が一気に気絶させて運ぶのを楽にしてあげるからね？」

「・・・・・・あれ？左から押さえつけるわけじゃないんだ？」

焰華さんの目が怪しく光っており、とりあえず人死にがでないことを祈りながら右のほうから彼女を抑える。

「落ち着いて！」

「触るなあ！このもこもこ野郎が！」

完璧に錯乱しており、いまだに偽りの世界で向かい来る羊の群れを退治しているのだろう・・・・・・そして、彼女は僕を間違はなく何かの“能力”で吹き飛ばした。

「ぐわっ！」

「あれ？」

今の悲鳴は僕ではない。飛ばされた僕は壁に衝突したのだが、痛くもかゆくもなかった。

「剣治！？」

「おや、時雨君も残っていたのかい？いや、それより何故君がここに？ここは女子が来るべき教室じゃないのか？」

「いや、それを言うなら剣治もこっちじゃないだろ！」

「・・・・・・そこは、ほら、あれだよ・・・・・・まあ、私としては非常に言いにくいことなのだが迷子になってしまっただけ・・・・・・ちょうど感ではいったこの教室にいつせいに女子が来るものだから驚いてこう



やって隠れて彼女たちが去るのを待っていたのさ。そうしたら出るに出られないような状況になったというわけさ。まあ、状況が変わったようだし、今は学校に籠城するしかないんじゃないのか？」

そういつて外のほうを指差す。あからさまに話を摩り替える気が満々なのだが、言われたとおりに視線を外に移す。

「・・・なんだろ、あれ？」

「さあね？」

剣治が指差す方向いるのは“影”だった。人の形をした“影”がこの学校の中に入ろうとしている。中には何だろうか・・・人形のようなものをもって喜んでいるようなものもいる。あれは・・・なんだろうか？マッスル・ポーズを決めている奴もいる。

「お、あれなんか時雨君に似てないか？ほら、なんだか根暗そうだぞ？」

「何言つてんの、あつちのほうが剣治によく似てるよ。きつと、近くで見たら檄似だよ！」

「二人とも、とりあえずここから逃げるわよ！」

後ろから首根っこを掴まれて僕らは引つ張られるようにして廊下に出たのだった。先ほどまで見えない羊と戦っていた女の子は気絶したのか立ったまま動かなかったので僕が引つ張つて言った。はかたとして考えられないタイミングで、放送が流れ始める。

『あゝ先に言っておくが君らが確認した奴等は夜にならないと学校内へと入れない。奴等を倒すも自由、逃げるも自由・・・すべてが自由さ。ちなみに夜までに地下の自室へと戻れば身の安全は保障しよう。無論、君たちが置き去りにしてきた眠っている人達も既に回収済み・・・彼らは家に帰ってもらう。この場所での記憶を忘れてもらってね・・・ああ、気をつけてもらわないと・・・外にいるあいつらも馬鹿ではないからね・・・』

どこへ向かうかは自由らしいのだが、困ったことに行くべき場所を僕らは知らない。いやいや、自由すぎてどこに行くべきかわからない。自由すぎるRPGで迷子になった気分だ。

「・・・剣治・・・」

「何かな？」

「今度の英語の和訳、僕だったよね？」

「そうだったなあ、確かにそうだ」

「二人とも！現実逃避してないで何か考えないと！」

剣治と僕に厳しい現実を見るように彼女はそういった。いやあ、厳しい現実よりも虚実のほうに僕は逃げるかなあ・・・

剣治はそんなことを言っている焰華さんの前に出て咳払いをした。  
「こほん・・・ところで時雨君、このちよつとうるさい女の子は誰だい？」

「ああ、この人は・・・炎宮焰華さん。火を使う“一族”だって好きな食べ物はトマトで・・・好きな色は赤、おてんばじゃじゃ馬娘だってさ・・・あ、誕生日は8月7日だってよ？去年は友達に祝ってもらったそうだって。彼氏はいたらしいけど、些細な価値観の違いで先月別れたって・・・彼女の友達はせつかくやってきた春を自ら冬にしてしまったって言ってたそうだよ？」

剣治はさも驚いたように僕のほうを見ている。

「そんなことまで言っていたのかい？」

「ちよ、ちよつと！私はそんなことまで言っていないわよ！名前しか名乗らなかったはずだし！」

顔を真っ赤にしてそんなことを言っているのだが・・・

「え、嘘！？さっき話しているときにどんどん話していったのは焰華さんじゃなかった？いやあ、僕のほうから話しかけようとしたら逆に彼女のペースに乗っちゃってさ・・・結局、僕は名前しか名乗れなかったよ？」

剣治はしらけた視線を焰華さんに送っている。

「・・・口が軽い女の子か・・・真っ先に裏切りそうなタイプだな。私としては興味がわかない。私は口が軽い男と尻が軽くて口が軽い女は嫌いなんだ」

「私もあんたみたいな利口ぶってるやつは大嫌いよ！」

お互いに初対面でこんなに悪口を言い合えるなんてすごいや・・・

・と感心している場合でもない。いまだに肩を貸している女の子は「羊が・・いや、私はこんなところでは負けない！こんなところで、負けてたまるかああ！！」とぼやいているし、まだお天道様はお空に輝いているのだが、油断は出来ない。そろそろ正午だ。

「とりあえずさあ、昼食を探しにいかない？」

「・・・・・」

いがみ合っていた二人はそっぽを向いたのだが一応、僕の意見には賛成してくれたようで、再び歩き始めた。窓の外にはさまざまな“影”たちがこっちにこようとしている。

「・・・・時雨君、他の連中はどうしたんだろうな？」

「さあ？どうしたんだろ・・・男側には行つてないし、残りの十名を僕たちで埋めたとしても残りは六人だと思うけど？後は全部男子じゃないかな？」

「まあ、今頃あいつらの餌食になつてるんじゃない？あんたもあんなといいんじゃないかしら？」

「そうなつても別に構わないね。意外と君は襲われないで逃げられるかもしれないねえ？」

いがみ合う、二つの心・・・彼らが和解する日がいつか来るのだろうか？

「・・・うつ・・・」

羊さん（仮名）に肩を貸したまま、僕らは食堂を探してさまよい始めたのだった。

「あゝそういえばさ、先生やお手伝いさんの姿がないね？」

「んゝそういえばそうだね？」

「まあ、私のお手伝いさんは今頃畑を荒らして農家のおじさんに追いかけられているだろうが・・・あのお猿、どこに行ったんだ？てか、猿には無理だろ、猿には！」

そんな話をしながら歩いていく。外のほうでは誰かが叫びながら逃げているようだ。

「うわあゝもう駄目だあ！誰か助けてえ！」

……幻影。あれは幻影さ……。僕は自分の实力を知っている。  
だから、自力でがんばって！ごめんね

### 第三話：記憶が話を变えるのか？（後書き）

やってきました第三話。第一話から物語が始まる前にいつも書いて  
いるあの人物・・・さて、あれは一体全体誰なのでしょう？いや、  
既にこの時点で今回の話の主要人物たちは登場しているんですけど  
ね。その中に、いるかもしれません。では、また次回でお会いしま  
しょう！

#### 第四話：来ると信じる其の心（前書き）

く作者とのお約束く小説を読んだ後は余韻に浸りましょう。あと、泣きたいときは泣きましょう

#### 第四話：来ると信じる其の心

今年も遂にくだらな余興が始まった

私の元へ来るか、あの男の元へ行き着くか・・・

奴はどうするだろうか？

私の元へと来てくれるのだろうか？

よけいな者を連れているようだが、奴がここへ来る確率をあげるものだと思えばいい

……………奴はきつと、来てくれるに違いない……………

四、

校庭のところで一人の男子生徒が影から逃げている。泣きながら逃げているところを見ると必死さが見えているこっちにも伝わってくる。そして、その男を見て一早く焰華さんが飛び出ようとした。僕と剣治はそれを当然のように止めた。

「何で止めるのよ！」

「落ち着け！奴は別に死ぬってわけじゃないんだ。いやあ、尊い犠牲だった・・・さて、あの影に捕まったらどうなるのか見させてもらおうか？」

「そんなことを言ってる場合じゃないでしょ！助けなきゃ！」

「ちよつと待って！あの人だって仮にも実力者じゃないの？自力で逃げれるかもよ？」

当てずっぽうでそういつてみると他の二人も納得したようだ。だが、その現実はどうやら甘かったようだ。男子生徒は僕らの目の前

の窓の外を走り抜ける。

「・・・もう駄目です！」

僕らが彼の逃避行を目撃して一分も経たないうちに彼は石に躓いて転んでしまった。そして、迫り来る“影”に今度は頭を下げ始めた。それを見た“影”たちはなにやら数人で会話を始めて動きを止める。哀れんでいるようだ・・・もしかして知能があるのだろうか？

「すいません・・・すいません・・・すいません・・・」

「おいおい、今度は哀願かよ・・・時雨君、行くぞ！あんな人として惨めな行為はやめてもらわなくてはな！なんだか見殺しにする気が失せた」

「わかった・・・やっぱり見殺しにする気だったんだね？」

先に走っていった剣治。僕は焰華さんに羊さんを見ておいて欲しいことを告げると窓を開けて外へと躍り出る。僕らに群がってくる

“影”を水で弾いて進む。

「・・・せやつー！」

剣治は右手に持っている剣をふるって先へと進んでいく。どうやら哀願攻撃ももはや限界が来たようで・・・彼の目前まで“影”たちは迫っていた。

「つつつくらえええー！」

剣治は握っていた剣を影に投げつける。光り輝く剣はそのまま三人？の“影”に突き刺さって“影”たちは姿を消した。それを見て何とか立ち上がる男子生徒。

「あ、ああ・・・助かったです！あんなたちは男だけど女神さまです！」

「ほら、そんなことはいいから逃げるぞ！私がここを止めておくからあそこで手を振っている女子生徒の所へ走って行くんだ！時雨君は急いで彼を援護！」

剣治は何も持っていない手に次の瞬間には剣を握って男子生徒の脱出口を開くために突き進んでいった。突き進んで行った後には影



が切り裂かれて転がっていく。

「そういうわけだから、早く行つて！」

僕は男子生徒を押すようにして前へと進む。彼の目の前、右、左、はたまた下からやってくる“影”たちをふつとばしながら焰華さんたちのところまで戻ってきたのだった。剣治は剣治で“影”たちの肩などを踏んで戦っている。

「お、俺を踏み台に!？」

と聞こえたのは気のせいだろう。

男子生徒を窓の中に放り込んで剣治に手を振る。

「おい、救出完了！」

「わかった、今行く」

影の波を避けるようにして剣治はスムーズにこっちにやってくる。その間、僕と焰華さんそしてようやく正気になった羊さんが寄ってくる“影”たちを食い止める。

「・・・よっしゃ、ゴール！」

剣治が入って急いで窓を閉める。普段だったら質量を感じて窓が割れそうだったのだが、見えない何かに阻まれたように“影”たちはそこで弾き飛ばされた。

「・・・一応、まだ昼だから校内に入ればこっちのもんってわけか・・・」

乱れた制服を戻しながら剣治は呟く。僕らは僕らでその場に座り込んでいた。

「いやあ、あなたがたのおかげで助かったつすよ」

先ほど助けた男子生徒は軽薄そうで糸目の人だった。

「なはは・・・」と笑っており、こいつは役に立たないかもしれないとここにいるみんなが思ったに違いない。

「あ、俺の名前は来月らいつき壘いって言うつす  
いまだに

「なはは・・・」と笑っているのだが、この人は本当に強いのだろうか？とてつもなく疑問に思っていたのだが、剣治が彼に近づいて

いった。

「・・・何故、外にいたのかね？奴らが外を徘徊していることを知っていて興味本位で外に出たのならもう一度外に放り出してやろうと思うのだが？」

掛けているメガネが光っている。まあ、危険を犯してまで助けたのだからそのくらいはいいか？いや、そうしたら何のために助けたのかわかったもんじゃない。

「あゝえつと・・・ほら、先ほど爆発があつたつしよ？あの時ちよつど外を眺めていたらその爆発で放り出された・・・いや、誰かに掴まれて放り出されたんすよ。それで、あいつらが現れる前にとりあえず校舎の中に入ろうとしたんすけどねえ・・・気がつけば囲まれて絶体絶命！そんなときにあんたたちが助けてくれたってわけっすよ！」

また

「なはは・・・」と笑う壘という男子生徒・・・まあ、明るい性格というのはわかったのだが・・・

「じゃ、何で戦わなかったんだ？あんたは確か雷の“一族”だったろ？顔を見て思い出したんだが・・・私の家のものにお前のことを知っている人がいたから聞いたんだが・・・今までの雷の“一族”中でもっとも強いと聞いているぞ？」

剣治はどうやら壘さんの事を知っていたようで、詰め寄っている。「あゝまあゝわけありませんよ。俺だって使いたかつたんですけどねえ・・・今後は大丈夫つすよ。もうご迷惑はかけないつす、隊長殿！」

そういつて敬礼のポーズを見せるのだが・・・これからが心配だ。「・・・んで、時雨君が今までつれてきていたその女子生徒。彼女の名前は？焰華君、君は彼女から名前を聞いたのか？」

「え、い、いや？さつき気がついたばかりだから聞いてないけど？」  
「それならちよつどいい。名前を名乗つてくれ。この状況のことを理解できていないのなら私がここのみんなを代表して説明したいと

思う」

やはり生徒会長としての素質があつたのだらう……ここで  
の主導権を完璧に手中に収めた剣治は話を先へ先へと持っていく。  
剣治に名指しされたちよつと暗めのイメージがある黒髪ロングの彼  
女は自分のほうを指差す。

「……うん、君だ。先に名乗ってほしいのならこちらから名乗っ  
て構わない。私の名前は剣山剣治。こっちの根暗が村雨時雨、こっ  
ちのうるさい女子生徒が炎宮焰華でこの抜けている男が来月疊だ。  
さて、これで充分だと思うが……君の名前は？」

「……風馬美羽<sup>かどまみはね</sup>」

たつたその一言が僕らのいるこの教室の温度を下げた。僕以外の  
人たちはいつもと違う表情を見せている。剣治は冷静にしていなが  
らも隙を見せない表情を。焰華さんは完璧に臨戦態勢をとっている  
し、軽薄そうだった疊さんも糸目を開けて鋭い瞳を覗かせている。

そして、僕は……

「あれ？知り合い？」

完璧に空気を読めないような人間と化していた……

「……時雨君、風馬美羽を知らないのかい？」

少々……いや、かなり呆れたように僕に視線を向けてくる。

「うん、まったく知らないなあ……」

焰華さんが首をひねるようにして呟く。

「……戦場に……散り逝く……羽……その羽根は散って  
ゆく者の羽ではなく、散らせたものの羽である……知らない？」

どうやら有名な話だったようなのだが、彼女は残念ながら僕は……

……

「知らない」

「……あゝ時雨君って言ったすよねえ？おたく、先ほどの戦いで  
見せてもらいましたけど次期当主じゃないんですか？結構な身のこ  
なしでしたけど？違うんすか？」

「え？うん、そうだけど？ちなみに僕の妹が次期当主」

「ああ、そうだった。時雨君は次期当主じゃなかったんだっ・・・時雨君、まれに他の“一族”同士の争いがあるのは知っているだろう？」

その場で生徒に教えるように剣治が説明を始める。

「うん、知ってるけど？」

「その仲介役としていつも“風馬家”って言われているどこにも属していない人たちがいるんだってさ。それで、とりあえずまずは力で双方を鎮めさせる。そこで、今度は交渉に移行・・・その争いに出ていた人物たちはすべて行方不明者となるんだよ。それで、最近は“美羽”って名前が有名なんだよ」

「へえ、そうなんだあ・・・美羽さんってすごいんだねえ？」

感心していると焰華さんが僕に噛み付いてくる。

「違うでしょ！美羽って言えば畏怖の対象なのよ！私のところの“一族”も何人行方不明になったことか・・・」

ため息をつく焰華さんなのだが、僕の“一族”でも争いや喧嘩のことを聞いたことは何度かある。

「でも、その喧嘩って争いに関係ある人たちじゃないんだよね？」  
三人の誰かに尋ねるようして話しかけてみると壘さんが糸目に戻して話し始める。

「そうっすね。基本的に争いを起こしたものの同士が喧嘩をはじめつす。だから、大体は自業自得となるっすよ？風馬にやられる者達は考えの足りない者たちだっすきくっす」

そういつて首をすくめる壘さん。

「とりあえず、美羽が裏切らない限りはどうやら実力不足に陥ることとはなさそうだね」

そういつて呟く剣治

「あれ？美羽さんって裏切るの？」

本人に直接聞いてみるのだが彼女は黙っていた。

「・・・あなたが私を見捨てるのなら、私は喜んであなたたちを道連れにしよう・・・」

ものすごく

「私、不機嫌なんです。あなたの言葉で傷つけられました」というオーラを発散しながらそう述べた。

「・・・見捨てないように最善をつくそう・・・とりあえず、昼食を食べに行こうか？」

壘さん、焰華さん、剣治、僕、美羽さんという順番で（あれ？僕と剣治の間、一つ開いてない？）ならんで歩いている。食堂を見つけてそこへはいるとき、美羽さんは僕にしか聞き取れない声で呟いた。

「・・・さっきの、嘘。心配しないでいいから・・・」

彼女は暗く笑ったのだった。先ほどの言葉は彼女なりの冗談だったのだろうか？

#### 第四話：来ると信じる其の心（後書き）

第四話となりました。いや、別に何かあるわけでもないんですけどね。さあてと、僕としてはうれしい限りです。短編からこのようにして連載になってくれて・・・まあ、いいことです。ちなみに、前書きのゝ作者とのお約束ゝは次回で終了です。

## 第五話：自身の約束（前書き）

く作者とのお約束く小説の初期段階を読んだら続けて読み続けましょう。面白くないという小説もいずれ面白く感じるようになることができます。

## 第五話：自身の約束

“影”と戦う奴は強かった

初めて私の元へとやってきたときは比べ物にならない

私の“能力”の上に間違いなく行っている

だが、いずれ奴の“能力”は自ら潰れるだろう

所詮は借り物・・・それは“能力”といえど変わりはない

.....期限までに私の元へたどり着けるのなら、私は奴を助けよう

.....

五、

「いやあ、やはりご飯はカレーに限るわ!」

カレーを前にしてがつついていいる焰華さん。それを見て剣治がため息をついている。

「何故、もうちょっと優雅に食べることが出来ないのだろうか?」

シチューをゆつくりとスプーンですくって食べている剣治。

「まあ、たのしいんじゃないんすかね?」

そんな適当なことを言っでご飯と魚を食べている壘さん。意外と庶民派だ.....

「.....うるさい.....」

静かな声でそう呟く美羽さん・・・はプリンを食していらっしゃいます。

「.....さあ、まだまだありますのでどんどん食べてくださいね」  
ここに来て美奈さんを発見。彼女は食堂で僕たちを待っていたの



だ。他の人たちはおながが減っているようで彼女がここにいることになんら疑問を抱いていないらしい。僕はおにぎりを食べ終えると真っ先に彼女の元へ向かった。

「あら、やっぱり村雨様は私に気があるんですか？」

「いえ、そんなことより美奈さん、他の人は？教師とか、他の人のお手伝いとか・・・」

「ああ、先生方は巻き込まれると大変ですので地下ルートを通って帰りました。残念ながらそこから逃げることは私たちには出来ませんよ。期限が過ぎるかやられて全員GAME OVERで記憶を失っておうちにつれて帰られるかです。ちなみに、私以外のお手伝いさんたちは奥の部屋でテレビを見ているんじゃないでしょうか？今日は私が食事を担当してますからね どうでした？おいしかったですか？」

「ええ、おいしかったです。ところで外にいるあの・・・」

外で何故か僕らと同じようにランチタイムに突入している“影”たちを指差す。

「・・・影”のような人たちは一体全体なんですか？」

「あれですか？あれは簡単に言うなら不死なる者達ですね・・・いえ、既に死んでるから不死かどうかはわかりませんがね 知能もありますし、相手にばれないように窓に近づいてみたら面白いことが起きますよ」

美奈さんにそういわれたので相手に気がつかれないようにして窓に近づく。まだ太陽は空に上がっており、彼らが中に入ってくることは出来ないだろう。

窓に近づくとなにやら聞こえてきた。

「・・・ったくよお、仕事とはいえ、こっちの世界の連中は人使いが荒くねえか？」

「そうだよなあ、まあ、高給だからいいんじゃない？ほら、俺たちって結構怖いじゃん？」

「そうだな、見た目だけが怖いからなあ・・・あ、こっち見てる

ぞ？」

僕のほうに視線を向かわせる相手。そして、可愛いランチボックスをさり気後ろに隠してこっちへと

「あゝぶあゝ」とゾンビのような奇声を発している。

「あゝすいません。あの、立ち聞きしてしまつて……」

「……ちつ、ばれたのか……。だが、さつさとあっちに行け。

仕事を邪魔するんじゃないの！ほら、俺たちは謎の細菌に感染された人間つてことにしておいてくれ！じゃ、今からもう一度行くぞ？……ぶあゝぶあゝ」

「そうだぞ、さつさとあつちのお前らの仲間のところに行けつての！ぶあゝぶあゝ……。相棒、この鳴き声であつてるのか？」

「え？あつてるだろ？映画もゲームもやったし、そうだなあ、弾を温存してたらあつさりやられた記憶もあるなあ……。ほら、さつさと行けよ！」

なんだかとても嫌なもの（ヒーローショーの裏方を見てしまった気分）を見てしまったと思つてしまった僕はもう一度“影”たちに頭を下げてその場を後にしたのだった。

「時雨君、何していたんだい？」

「あゝまあゝ外にいた“影”たちの様子を見てきたんだ……」

「そうなの？村雨君つて意外と度胸があるんだねえ？それで、どうだった？」

「ど、どうつて？もつと具体的に言つてくれないと……」

なんだか具体的に見てきてしまった僕としては夢を壊された気分だ。美奈さんのほうを見れば彼女はにこりと笑っている。

「……何か、食べてた……？」

美羽さんがそんなことを言つてきている。

「え、あゝ可愛い……。いや、ちよつとゲテモノだったかな？ほ、ほら……。モザイク掛けないと映せないような奴？」

「……なるほど……」

一同納得してくれているのだが・・・本当にこれでよかったの  
だろうか？そう思つて外のほうを見てみると先ほどの“影”と思わ  
れる二人組みが親指を立てて

「そうだ、それで間違つてないぞ！」というような表情（いや、真  
つ暗でわからんのだが・・・）を見せる。うん、どうやらこれであ  
つていたようだ。

「じゃ、これからどうするの？外に出てみる？」

「何を望んでそんな危険なことを？私らが求めるものは安全にそし  
て、記憶を維持したままでこの島を脱出すること。だから、さつき  
の放送であつたとおりにこの島のどこかにある“ゴール”に向かつ  
て進めばいいんだ。残りの五人と顔を合わせていない今、私たちに  
出来ることはそれだけ・・・いずれ、生き残っていれば残りの五  
人とも会うことが出来るのではないか？」

剣治のその提案にみんなは頷き、立ち上がる。食堂を出る途中、  
先ほどの“影”の二人組のほうを見ると手を振つてくれた。僕  
も手を振つたのだが・・・それがいけなかつたようだ。

「・・・ねえ、あなた本当に村雨君？」

「え？」

焰華さんが疑うような視線を僕に向けていた。その言葉に他の人  
たちが止まる。そして、僕にみんなの視線が注がれる。

「・・・さつきからなんだか怪しい行動を繰り返してない？」

完璧に僕を何かの犯人に仕立て上げたいような視線を送ってくる。

「・・・焰華君、どうかしたのか？」

剣治が彼女に尋ね、彼女は剣治のほうを見る。

「・・・村雨君って怪しい。そう私は思つてるのよ。大体、自ら“  
影”の近くによつて行つたり、さつきも誰かに手を振っていたじゃ  
ない？彼のお手伝い的美奈さんってひとはこつち側にいるし・・・  
絶対に“影”の手先だわ！」

「ええっ！！」

僕は驚く。そして、他の人を見るのだが・・・

「ふむ、確かに彼女の言うことも一理あるな」

「け、剣治!？」

「そうっすね。元からあやしいと思っていたっす」

「・・・壘さん、あなたはすぐに心変わりをするようなひとだから別にいいよ」

「あ、私はの〜かうんとでお願いしますね」

「美奈さん、僕のお手伝いさんじゃなかったんですか？」

「・・・」

「その無言が逆に怖いです。何か、言ってほしんだけど・・・」

焰華さんのほうを見ると、完璧に僕が

「女の敵だわ!」と言っただけでいるようだった。いや、何その表情?僕があなたに何かしましたか?

「とにかく!私は偽者と思われる村雨君についていきたくないわ!ここで剣治と村雨君の班にわけましょう!」

「え、そうしたら戦力が分担されて逆に危ないんじゃない?」

「俺も賛成っす!」

「・・・じゃ、多数決で決定だからね。どっちの班に行きたいか決めて。私は当然、偽者といたくない!」

そういつて剣治のほうに歩いていく焰華さん。あれ?気がつけば僕はいつの間にか偽者決定!?

「じゃ、俺も剣治君の班に行くっす!」

そういつてあっさりと剣治のほうに歩いていく壘さん。あんだ、いずれ背後から襲いたいという感情が芽生えてきましたよ・・・  
「・・・じゃ、時雨君?私たちはこっちから行くから、君たちはあっちのほうからいってくれ」

「剣治、なんて君は白状なんだ・・・まあ、知ってたけどね」

「じゃね、偽者」

「ひどい・・・」

「じゃ、さよならっす!」

「壘さん、僕はあなたを許しませんよ」

こうして、僕のところに残ったのは美羽さんだけだった。ちなみに、美奈さんは食堂のほうへと僕らを見送っていつてしまった。

「……………」

「あの……………」

「……………大丈夫、私にはわかるけどあなたは本物。だから、私はこっちに残ったただだから……………」

それだけ言うと彼女は僕らが進むべき場所のほうに進み始める。気がつけば剣治と僕の班ではなく、剣治と美羽さんの班になっている気がする……………いや、事実上そうなっているじゃないか！

「これからどうするの？」

「……………とりあえず、その“ゴール”を見つける。あの三人は一度離れてしまったからもう信じないほうがいい。なぜなら彼女たちが時雨を信じなかったのと同じように離れてしまったから。だから、私たちは自室に戻らずに動ける間に“ゴール”を探し当てる。そうしないと虚を突かれて負けてしまうかもしれない……………」

美羽さんはそれだけ言うて再び歩き出した。その後ろに後光を感じたような気がした僕なのだが、やはり、寝ぼけているときは別人である。これは非常に期待できる人材が残ったのではないか？

「……………時雨、きちんとついてきて……………」

振り返って僕にそう促す彼女に僕は頷いて走って彼女に近づいたのだった。

「うん、これからもよろしく！」

「……………まあ、お互いやられないようにがんばらないと……………」

僕らは僕らの道を進むべく、新たな一步を踏み出したのだった。

## 第五話：自身の約束（後書き）

いやあ、終わってしまいましたね、作者とのお約束・・・自分でがんばったと思ってても他人から見ればがんばっているという部類にも入らないと思われますが・・・。さて、そんなことはおいといて、今回の話にはいつていきましようか？今回は見事に分かれるような感じになってしまいました。それもよくあることです。作者はよく他人と食い違いが起きてしまいます。人間関係なんて些細なことで崩れてしまうということはご存知の通り？ですが、中には些細なことで喧嘩をして分かれてしまったとしても相手のことをきちんと見据えている人もいるということを美羽を通して伝えられたらよいと思います。では、そろそろこの章も後半戦に入ってきました。この章の終わりはどうなってしまうのか・・・期待している人は首を長くして、期待していない人は夜空にきらめく星たちを眺めて待つていてください。

## 第六話：過ちの消し方（前書き）

作者の脳内小説メーカーその一、「先輩、今度の時雨は上半身と下半身が合体して戦うっていうのはどうでしょう？」「後輩よ、考える・・・それじゃ、コメディではなくてSFの世界になるからな？ほら、読者の皆様に何か一言言っただよ！」「あ、皆さん、今回も短編から連載になった小説をよろしくお願いします」「それ・・・挨拶か？」「大体、前書きって注意書きを書くところですよね？」「そうだ、だからこんな感じにするのが一番いいんだよ。えゝ皆さん、感想をお一つよろしくお願いします」「・・・それ、注意か？」

## 第六話：過ちの消し方

奴は迫ってきている

もうまもなく、私の元へと来るに違いない

だが、まだ確定したわけではない

決まったことなど、一つなどないのかもしれない

過去のみ、決まったことなのだ

……………過去にやった過ちはどうしたら消せるのだろうか……………

六、

僕の目の前を歩くのは僕より頭が一つ分小さく、物静かな少女だ。

「……………」

「……………」

僕らの間に会話なんてないし、張り詰めた空気が漂っている……いや、そうじゃないのかもしれないな。ちよつと話しかけてみれば変わるかもしれない。世の中っていうのは自分から動かさないといけないのだ。経済世界を巻き込めるほどでなくとも、この生き地獄のような静寂を打破することはできるはずだ。

「……………あ、あのさ……………美羽さんって強いんでしょ？」

「……………強いかどうかはわからない……………私は私に課された事をこなせるように努力をしているだけ……………」

「そ、そうなんだ……………」

こ、こんなところでくじけている場合ではない。もっと攻めるのだ、僕よ！



「・・・え〜と、家はどの辺り？」

「・・・それを聞いてどうするの・・・？」

完璧に怪しい奴を見る前にシフトチェンジしてしまった美羽さん。ああ、どうしようか？こ、こうなったらやけくそである！進め、進め！僕には前進あるのみだ！

「・・・彼氏とかいるの？」

か、完璧にはずしてしまった！そ、そんなに僕を見ないで・・・

「・・・私に興味でもあるの・・・？」

その無垢な瞳で僕を見ないで欲しい・・・は、話をそらさなくては・・・何か、何か辺りに会話を成立させるようなものはないのだろうか？

静寂な校舎に変わりではなく、一階を歩いている僕たち・・・そして、外を歩いてどうやって中に入ろうか考えている（フリをしているに違いない）“影”たち。中には僕に正体というより、それが仕事だということがばれたのを知っているのか露骨に僕に何かのサインを送ってくるような連中もいる。おい、そこ、そのポーズは何だ？

「・・・今度は、急に黙り込んで・・・変な人・・・」

遂に、遂に変人か・・・いや、まだまだ！何か会話を続かせねばいかん！そうしないと僕が絶体絶命のときに助けてもらえないし、良好な関係を保たなくては！絆が大切なのだ、絆が・・・

「あゝまあゝさつき興味があるのかって聞いたけど・・・ほら、やつぱり何かと知っておいたほうがいいでしょ？」

「・・・何を・・・？」

そんな不思議そうな顔をしなくてもいいじゃないか・・・うう、なんだかこの人は何も知らなさすぎるという感じがする。

「・・・その、お互いのこととかさ・・・」

「・・・そ、そんなこと・・・あなたといるとちょ、調子が狂う・・・」

いえ、調子が狂うのはこちらのほうです。見事に話すタイミング

などをあなたの無口が妨げています。

「・・・私のことを知りたいというのなら、ここを出てから・・・教えてあげる・・・」

そういつて顔を伏せるようにして歩き出す美羽さん。その後姿においていかれないように僕は歩を進めたのだった。

「・・・いい風・・・」

「そうだね」

そして、なぜだかそのまま学校の屋上へとやってきてしまった僕たち。ここまで来る間に交わされた会話は一つもない。なんだか外からは

「ひゅーひゅー」とか

「お熱いねえ！」などという非常に子供じみた言葉が聞こえてきた気がする。そのたびに校舎の外を睨みつけてやると彼らはまじめに「ぶあくぶあく」といつて僕らを掴もうとしたりするのだった。まったく、奴らは何をやっているのだろうか？まじめに仕事をこなして欲しいものだな。

「・・・ここ、変・・・」

「・・・そうだね、変な連中がたくさんいる・・・」

僕は眼下に犇いている“影”に水をぶつける。野郎どもはいまだに下で僕らをおおっているように見える。

「・・・いや、あの“影”のこともあるけど・・・時雨に感じる何かを感じる・・・気がする・・・」

「どういう意味？」

「・・・時雨は確か、次期当主ではないといった気がする・・・」

「そうだよ？それがどうかしたの？」

「・・・この島に来て変わったことは・・・？」

僕のほうを揺ぎ無い瞳で覗き、僕はそんな彼女に

「ドキリ」としながらも考える。この島に来て変わったこと・・・？

「ああ、そういえば以前はほとんど“能力”が使えるこなせてなかったのに楽に使えるけど？普段はあふれ出すエネルギー？に振り回されるような感じがするんだけど・・・お箸を振り回すぐらい簡単だなあ・・・」

今まで気がつくこともなかった新事実！

「・・・なるほど、やはり時雨は“器”・・・私が感じたことは間違いなかった・・・」

「・・・“器”？それって何？」

僕がそう尋ねると彼女は呟くように答えた。

「・・・それは文字通り。この世界に広まった“能力”を受け取る杯・・・皆、元から“器”の才能はある。まあ、“能力”を持つものはさつきも言ったとおり持っていないと使えないものだから・・・でも、世の中には“能力”という水が入っていない空の“器”がある・・・きつと、私の知るところでは時雨だけだろうね・・・」

「え？でも僕は普通に“能力”が使えるけど？」

それならちよつとおかしいことになるのではないのだろうか？

「・・・きつと、それは時雨の元からの“能力”じゃない。誰か、誰かが時雨に“能力”をあげたと思う。だけど、やっぱり他人の“能力”だから使いすぎると“器”にも影響がある。他人の靴を何日かはいてみればわかるけど、足がだんだんと痛くなってくる・・・いずれ、その“能力”も使いすぎると“器”である時雨の体に何らかの影響を与えらると思う・・・」

「そ、その何らかの影響って具体的には何？」

「・・・それは・・・やっぱり、体が動かなくなるとか、押さえ出る“能力”を制御できなくなつて内から破裂するとか・・・そんなのじゃないかと思う・・・」

「す、推定！？そんな適当に言わないで欲しいんだけど！」

ああ、さようなら、いずれ僕は内から破裂するのか？いやいや、意外と穴という穴から水が吹き出てそのまま逝ってしまうかも知れ

ない。

「……あゝ大丈夫だと思う……」

僕を慰めるようにしてよしと頭を撫でてくれる美羽さん。あの三人からは非常に恐れられていたのだが、本当は優しい人に違いない。

「ありがとう……根拠のない優しさはなんだか返って傷つきそうなんだけど、僕は無表情な美羽さんに慰められたことを光栄に思うことにするよ」

「……何だか素直に喜べない……」

立ち上がって背伸びをする。そろそろ夕焼けがやってくるだろう。現に、屋上に二人して立っている僕らを太陽は茜色に染め上げてくれている……

「……って！ちよつとまった！これじゃ、校舎に戻れないんじゃない？」

「……まあ、確かに……夜通しで探すのは“影”の数にもよるけど、今は無理そう……時雨、あなたは今何が出来る……？」

そうたずねてくるのだが、この僕に出来ることは……ないと  
いったほうがいいだろう。

「……ごめん、思い浮かばないや……」

「……そう、それなら立ち入り禁止区域の詳しい場所とか知らない……？」

その言葉になにやらかんじるところがあり、僕の記憶の細部まで  
つめていく。

「……あつた！思い出したよ！僕の部屋の隣に行ったらいけな  
いっていわれている場所があつた！」

あまりのうれしさに僕はジャンプをしていた。

「……それなら、そこに行くしかなさそうね……」

「うん、そうだね……でも、そこに行くときは私を連れて行って  
欲しいって美奈さんが言ってたんだけど？」

その旨を伝えると、彼女は顔をしかめながらも決断を下した。

「……構わない。どうせ、食堂の前を通るのだから……」  
「そう？それなら急ごうか？」

僕らは沈み行く太陽を見ることなく、校内へと戻り始めたのだった。

屋上から走ること、数分。僕らは一階の食堂へとたどり着いた。外にいたはずの“影”たちは何かを待っているかのように外で瞑想をしている。そろそろ、時間だからだろうか？あの時話し合っていた“影”の二人組みは僕を見つけると手を振っていた。僕は美羽さんを見ながら隙を突いて手を振ったのだった。

「……美奈さん！」

「おや、なんでしょうか？」

にんじんを剥いている美奈さんはいつものように振り返った。

「……僕の部屋の隣に行きます！だから、ついてきてください」  
「……わかりました。ちょっと待っててくださいね　これが終わったら向かいますので……」

彼女はにんじんの皮を丁寧に剥いて僕らの元へとやってくる。

「あの、他のお手伝いさんはいいんですか？」

「ええ、いいですよ。私の代わりにきちんと職務（夕食）をこなしてくれるでしょう。プライベートではあまり付き合いなんてありませんが、とてもいい人たちですからね」

そういつて走って僕らと一緒に食堂を抜けたのだった。食堂からは「あつ！美奈！さばるなっ！！何？『働かざるもの食うべからず？』ということとで夕食をお願いします？」ってあんたがさばってるですよ！何なのよ、もうっ！！」

というお叱りの言葉が飛んできたのだった。

僕は苦笑しながらも美奈さんと美羽さんとともに校舎の廊下を駆け抜けた。

## 第六話：過ちの消し方（後書き）

さてさて、なんだか暴れ始めてきているような雰囲気に関わりを伝えてきそうなこの状況・・・今のところ第九話ほどでこの話は終わると思われます。ちなみに、前書きで後輩のほうが言っていた「時雨の合体」は実際に考えていたことなのですが、文字通りSFになっちゃったのでやめました。まあ、これからは新しい前書きシリーズを楽しんでください。

## 第七話：待つべき価値を持つ者（前書き）

「作者の頭の中の小説メーカー」「え、今回はこの作品の今後のことについて・・・え？あとがきでやれって？わかりましたよ、ぶつぶつ・・・じゃ、今回は小説を読んでいる全ての人々に伝えたいことです」「さっさと言いたまえ、助手」「わかってますよ。え、皆さん、面白い小説があったら自分の友達に薦めてみましょう。おっと、友達いなくても家族でもいいと思います」「ペットは？」「ペットが文字を認識できるほどの実力を持っているのならOKです」

## 第七話：待つべき価値を持つ者

来る！来る！来る！

私の処へ奴が来る！

私は間違っていないかった！

待っている意味があつたのだ！

この桜の舞い散るこの場所で！

……奴を待っている価値があつたのだ！……

七、

ようやく地下へと向かうことが出来る階段を見つけた。既に夕日は半分ほどその姿を地平線に沈めており、それは同じようにして僕らの行動時間の終了を意味する。階段を駆け下りて広い廊下へと下りることが出来た。

地下へと向かう途中、僕らの目の前に剣治、焰華さん、ラストに壘さんが立っていた。皆僕らと目をあわさないようにして下を向いて力の入っている感じは受けない。

「……………」

「……………」

「……………」

「ねえ？何で無口なの？剣治？焰華さん？壘さん？もしかして、美羽さんの無口が移ったとか？いや、それなら僕のほうが先に移るよね？」

「……………時雨、離れる……………」



近づこうとした僕と剣治たちの間に疾風の速さで美羽さんが現れる。

「どうしたの？」

「……そいつら、あいつらじゃない……」

静かな言葉の中にとげが混じっている。しかも、代名詞立て続けだ。

「いくらなんでもそんな……」

「……信じないというのなら……あの頭に書かれた文字を見ればわかる……」

顔を下げていていた一人（焰華さん）に風をぶつける美羽さん。

「……いまさら頭に“偽者”って書いている偽者はいないよね？」

「……どうだろう……？」

うつろな瞳とおでこには“偽者”という二文字。これは間違いなく、手抜きとしか思われぬ敵だろう……。そこはかとなく、同情を感じ得ない。

「でも、遊びで頭に“偽者”ってつけたのかもよ？流行を追いかけてるとかさ？」

「……いや、流行じゃないと思う……」

「まあ、当然ですね そんなことを流行と思っっているのは村雨様だけかもしれません」

冷たくあしらわれて僕はガクリときたのだが、そんなことを言っている場合ではない。

「じゃあさ、本物はどうしたのかな？あの“偽者”たちはこっちに襲い掛かってくるそぶりもみせないよ？事実問題、静かに通れば気がつかないかも……寝てるんじゃない？」

「……いいや、そういうわけじゃない……近づけばきつと襲い掛かってくる……時雨、今あいつらを水で吹き飛ばすこととかできる……？」

「言われたとおりにやってみるよ！」

右腕を地面に叩きつけるようにすると、僕の右手の先から激流が

流れ始める。トイレのひねりをひねって出てくる水の量とは桁違いの量であり、この“能力”さえあればもし外でふとしたときに便利である。いや、そのふとしたことなど一度もなかったが・・・

「ふつとべえ！」

三人めがけて激流を放ったのだが、僕の水は“偽者”である焰華さんの“能力”と相殺されてしまった。辺りに蒸気が立ち込める。

「・・・駄目だったみたいだよ。やれやれ、どうしたもんだらう？」

「・・・時雨のお手伝いさん、これ以外には道はないんですか・・・？」

そろそろ夕日も僕らにさよならと挨拶をして去っていつてしまう。そうしたらもう大変。ここは僕らの部屋でもなんでもないとただの校舎なので“影”たちは喜んで入ってきて僕らに襲い掛かるだろう。

だが、これが虚構なフィクションならご都合主義が・・・

「ないですね・・・」

厳しい現実から逃げることなど、出来ないのかもしれない。僕らはそれを今知った。

「・・・それなら、やはりこの人たちを倒すしか・・・」

「そうだね、“偽者”だから別に倒したって構わないよね？・・・くくく、剣治めえ、日ごろの行いをここでくい改めて懺悔するかい・・・この前のお返しにボコボコにしてあげるよ」

「おいおい、時雨君、心の声前面に出てきてるよ？」

「！？」

振り返るとそこにいたのは剣治たち三人だった。

「あれ？なんでここにいるの？」

そうたずねると、焰華さんはさも当然といったばかりで僕に告げた。

「・・・ほら、考えてみなさいよ。夜になったらあの黒い連中が中に入ってくるんでしょ？助かる方法は自分の部屋に戻ることに決めたじゃない。この学校の地下へいく道はこの校舎の中だったらここ

だけのよ？来て当然だわ」

なにやら不機嫌そうなのを見るとどうかしたのだろうか？僕は笑っている曇さんのほうを見る。

「ああ、そんなに心配そうな顔をしなくてもいいですよ。焰華ちゃんの時雨君に申し訳ないと思いながらも謝れないだけですよ。さつき、勘違いして時雨君を“偽者”扱いしてしまったからつすね」

「そ、そうじゃないわよ！あ、あんたこそ村雨君の班に行かなかったじゃない！」

食って掛かっている彼らだが、今この状況を冷静に受け止めて欲しい。今とても、危険な状況のはずなのだ。だが、なんだろうか？この高校の休み時間のような喧騒は？

「……とりあえず、どうする……？」

美羽さんの一言を三人はきちんと聞いたのだろう。剣治は首をかしげながらも僕らに提案した。

「……誰か一人が囷になって……」

「囷になって……どうするの？」

「残りが見捨てて地下に向かって自室に向かうとかどうだい？」

「それじゃ、一人犠牲にならなきゃいけないじゃない！」

剣治の胸倉を掴んでそのまま宙に持ち上げる。すさまじい怪力だ・

……

「じよ、冗談さ……あいつらは私たちの“偽者”だとするならば正攻法でいくしかあるまい？」

「どういうこと？」

しゃべることに今の剣治にとってはとても必要な酸素が彼から逃げていく。だが、そんなことにはお構いなしに焰華さんはさらに力を加えているようだ。いや、ただ単に気がついていないだけなのかもしれない。あ、ちなみに彼ら二人以外の僕たちはその現状をただただ傍観していただけだ。別に助けようとは思っていないわけではないが……

「……私ら三人である“偽者”とかぬかす連中を倒せばいいだ

け・・・だ」

「ああ、なるほど！」

いきなり解放された剣治は着地もうまく出来ないまま、地上へと堕ちてくる。

「ぐへっ」という声と共に無様に倒れた剣治に壘さんが近寄る。

「・・・生徒会長つてのも地に堕ちたつすね 助けたくてもあれじや無理つす」

その顔がものすごく喜んでるようにも見える。

「君と一緒にしてもらいたくはないな・・・じゃ、時雨君たちは先に地下に行くといい。ああ、気にしなくて結構。私らが“偽者”に負けることなんてないからな」

そういつてそれぞれが自分たちの“偽者”に踊りかかっていく。

「さ、村雨様と風馬様・・・彼らの犠牲を無駄にしないように地下へと向かいましょう！」

「え、やられること前提！？」

「・・・戦いとは常に非情なものよ・・・」

「え、何言ってるの！？何？その悟りきつたような表情は？」

剣治たちが戦っている“偽者”たちは美羽さんが言ったとおり、近づけば動き出したのだった。勿論、彼らが使っている“能力”をそっくりそのまま使って彼らと戦っている。

僕らが移動できる範囲を残しながら戦っている彼らの合間をぬって僕らは地下の階段へと飛び込むようにして地上から姿を消したのだった。

長くて広い廊下を駆ける途中、この島に来たときと同じような感じを再び受けた。

「・・・時雨、どうかした・・・？」

「んゝ何か感じない？」

「・・・何かって・・・？」

「いや、言葉で言い表すのはちょっと・・・」

僕の自室をととう越える・・・その瞬間に感じていた何かはさらに大きくなる。そして、それとは別の何かを感じた。

「・・・ねえ、何か来てない？」

「・・・御察しの通り、廊下の奥から何か来てますね・・・」

美奈さんがそういつて立ち止まる。道案内の人が止まれば後ろの僕らが立ち止まるのは当然のことなので・・・止まった。

「・・・何、あれ？」

ちよつと暗い地下の廊下を目を凝らしてみると・・・

「・・・時雨がたくさん・・・？」

いつも鏡で見ている

「自分」が沢山現れた。見事にその動きは統一されており、うつろな目に額にはご丁寧にも達筆で“偽者”と書かれていた。

「ぼ、僕っていつの間に量産されてたの!？」

「さあ、どうでしょうか？性能のいい機体はよく量産されるって聞きますからね・・・あの量産型の村雨様はどのような実力を持っているのでしょうか？顔がちよつとゆがんでいるようですが、オリジナルより弱いんでしょうか？それなら、虐めがいがありますね」

「・・・まあ、時雨なんて一人で充分・・・」

きつと、きつと二人はかつこつけてそんなことを言っているのだろうが、その量産型のオリジナルである僕は傷つきやすい“心”というものを持っています・・・ぐすん・・・

「・・・村雨様に風馬様・・・ここは私に任せてください」

そういつてどこから取り出したのか、モップを取り出した。

「・・・そんなものどこに持っていたんですか？」

「ふふ、それは秘密です・・・さ、私が道を作りますから死ぬ気で二階へと降りてくださいね」

表情一つ崩さず、彼女はモップを前に掲げると恐ろしいスピードで隊列をつくつていた偽者の僕に突撃を始める。

「・・・時雨って弱い・・・」

その攻撃にあっさりと吹っ飛ばされてその場に倒れ行く僕の量産

型・・・そして、追い討ちをかけていく美羽さんの言葉・・・  
いいんだ、どうせ僕なんて根暗なんだ・・・そう自虐しながら  
僕は駆け抜けた。

## 第七話：待つべき価値を持つ者（後書き）

さて、前書きで書いたとおり今後、この小説の方向性を伝えておきたいと思います。自分なりに考えているのは面白ければ何でもあり・  
・ではなく、面白いが、社会の常識を守ったもの（誰かを中傷したり軽はずみで重みのある言葉を使わないこと）を目指していきたいと思っています。

第八話： ” いた ” は過去形今は違う（前書き）

く作者の中の小説メーカーく「あゝ美奈さんに・・いえ、皆さんにあとがきでこの作品の存続に関わる質問をしたいとおもいます」「冗談じゃなくてマジです。本気とかいてマジと読みます」



第八話：“いた”は過去形今は違う

奴はたどり着いた

この場所へ

いや、正確には私のいる場所の前へ

私は求めていたのかもしれないが

今すべきことは唯一つ

……… 未来はわからないから面白いのだ。さあ、ここで話に決着をつけよう………

八、

美奈さんが僕の量産型を殴り飛ばしているいや～な音がここまで聞こえてくる。

「……… 今、泣き叫ぶ声が聞こえた………」

「……… そうだね、それが美奈さんの声じゃなくて僕の声だというのは充分に理解できたよ……… でも、美奈さんに言われて地下二階に来たのはいいんだけどさあ………」

僕らの目の前に広がっているのはたんなる大きな扉だ。しかし、どこかでこの扉を目撃したのだが……… 夢で見た気がするのだが……… どうだったかなあ………

「……… 時雨、どうするの………？」

美羽さんがそう聞いてくる。

「ん～何で？ここまで来たらあけるしかないんじゃない？」

「……… 確かにそうだけど、場所はもうひとつあるはず………」

「ああ、そういえばそうだったんだっけ？でも、いまさら探し始めるのも面倒だし・・・」

僕は扉に手をかけた・・・その手を美羽さんが掴む。僕は何故かぎよっとして彼女のほうを見る。

「・・・覚悟はいいの・・・？」

「な、何の覚悟？」

「・・・」

彼女は答えない。手を離さずに僕を見つめ続けるだけだ。

「僕は・・・」

「・・・」

「僕はここを開ける。なんだか思わせぶりな感じだけど、まだこれで終わりじゃないはずなんだ！」

勢いよく扉を押す・・・だが、扉は開かずじまったまま。力を思い切りいれてもあかないのだ。これはどうしたのだろうか？

「・・・」

もしかして、もしかしていまだに手を掴んでいる美羽さんの力！？嘘！全然力が伝わってないんだけど・・・

「み、美羽さん・・・」

「・・・何？やっぱりやめたくなつたの・・・？」

「そんなに扉を開けてもらいたくないの？」

「・・・開けてもらいたくないけど、開けたいんでしょ？私はそれを拒むことはしない・・・」

「じゃ、拒んでいないのに何であかないのだろうか？」

「・・・ああ、それはこれは手前に引く奴だと思うけど・・・？」

「・・・」

言われたとおりに手前に引くと、あっさりと開いた。僕はバツが悪いことこの上ない気分で中に入る。中には何もなくてただただ、上が果てしなくコンクリートに囲まれながらも続いているといった感じだった。

「あれ？美羽さんは来ないの？」

「……ごめんね、今まで黙ってて……」

「何を？それよりどうかしたの？」

美羽さんは立ち上がってそのまま僕を追いこした瞬間……彼女は姿を消し、いままでコンクリートだけだった部屋に変化が訪れた。

「……これは？」

僕の目の前に広がったのは外でいまだに降り落ちてきている桜の花びらだ。

そして、気がつけば床は草が生えており、部屋の中央辺りだと思われる場所には一本の大きな桜の木がどっしりとその存在感をアピールしていた。そして、中央辺りでどこかの踊りを踊っている一人の人間を見つける。先ほど消えた美羽さんだと思われるのだが……服は神社の神主さんが着るような感じの服だし、その手に握っているものはなんだろう？扇子にも見える。

「……」

舞い散る桜の合間をぬうようにして僕はその人物に近づく。そうすると相手はこちらに気がついたのか、舞うのをやめて立ち止まる。なぜだか、懐かしい感じがして僕も立ち止まってしまった。

「いや、懐かしいんじゃない……この感じは……」

この感じはいつも、いつも……

彼女はこっちを向いた。その顔には夜叉の面がつけられている。

“能力”を……

彼女はその手で面を掴む。

“能力”を使うときに感じるものだ！

夜叉の面は外され、その下から驚くほど白くて整った女の子の顔が現れる。

「……………美雨……………」

その彼女の名前を春雨美雨<sup>はるためみう</sup>という。

彼女は生まれながらにして“器”を持たずに“能力”だけを所持して生まれてきたらしい。

当然、“能力”という水を受け止める杯である“器”という能力を持っていなかったので彼女は“能力”が開花してきて数年で死んでしまふと宣告されていた。しかしあるとき、一人の男が彼女と同年代の息子を連れてやってきた。男の血筋は“器”を多く排出してきた一族なのだが、元は水の“一族”だったそうだ。だから、その少女を助けるために最善をつくした。

“能力”とはちよつとした拍子で相手に“移動”してしまう。それは以前からよく言われていたことなので、男は自分の“器”を彼女に渡そうとしたのだった。

少々危険の伴うものだったので彼らは孤島へとやってきたのだ。成功の兆しが見えてきたのだが、彼のやろうとしたことはほとんど失敗に終わった。

少女の能力はほとんど男に移動し、男と少女はそのあおりを受けてそれぞれが孤島の別の場所にその“能力”に縛られてしまった。つまり、“能力”という水におぼれる感じになったのだ。運よく、難を逃れることが出来た少年は水の“一族”に引き取られて当主にその“能力”を見つけられてそのまま“一族”の中のある家族のところで育てられることとなった。少年は拒絶することもなく、新しい家族を受け入れた。

元からあったものを変えるのは大変なのだが、なくなってしまったものを埋めるのは簡単なのである。

少年の記憶は消えていた。

だから、元からこの“一族”にしていると感じていたのだった。

そして、孤島に残されてしまった少女は成長を継続し、自分なりにあふれ出す“能力”を制御することが出来るようになったのだ。

そして、“能力”を駆使して感情の乏しいながらも自分と同じ容姿をもつ少女を作り出した。既に所持していた“能力”は奪われるような形で時雨に行ってしまうているので新たに“能力”を作り出したのだった。そして、作り出した自分の分身を風馬の元へと送り込んだのだった。自分の“能力”を所持している時雨を探すために・

「私のことを覚えてる？」

だんだんと近づいてくる美雨・・・僕は後ろに下がる。

「・・・・・・・・」

近づいてくることに不思議はない。知り合いならば、知り合いならば・・・久しぶり会えば近づいていくのが当然だ。それが、思い人ならば・・・

しかし、彼女は浮いている。そして、彼女は僕に会いたかったわけではなさそうなのだ・・・

「時雨君、ベッドにいた私のところまでよく話に来てくれたよね？」  
思い出した、その記憶で確かに僕は彼女のベッドのところへやってきた。彼女が人間から“能力”の塊になったあの日も・・・  
さらに近づいてくる彼女からまた僕は一步、桜が舞い散る中を下がる。

「あの日もさあ、いつものように外に桜がふつてて・・・来ちゃ駄

目だつて言われたのに私が頼んだらあの日も来てくれたよねえ？」

僕は彼女が近づくよりも早く、後ろに下がったつもりだったのだが……

「壁！？」

既に後ろには壁があつた。これ以上、後ろに下がることなど出来ないようだ。

「……待つてたんだ、ずっと」

愛おしそうに、僕に近づいてくる美雨。僕はそれを拒むことなどできず、ただただ、立ち尽くしていた。

「大丈夫、そんなに怖い顔をしないで？」

「何故？この展開なら間違いなく、僕を殺して連れて行くような感じだね？」

そうたずねると彼女は悲しそうに頷いて僕に告げる。

「そうだよ、君から“能力”をもらった後は当然、時雨君と一緒に消えようと思つてた。だけどさあ、私と時雨君が消えても消えない人物ができちゃつたの。それが、美羽……彼女は見事、私の代わりに世界を見てくれた……ちよつと血なまぐさいところも多かったけど。だけど、彼女を通して時雨君とも一緒に入れたからさ……私はもう、充分。だけど、元私の“能力”だったものは時雨君に盗られたまま……だから、時雨君の体を蝕んでいるそれだけは私がもらうね？美羽のここでの記憶はもうなくなっていると思うし、今の彼女の家にもう戻つてる。時雨君、暇なときに彼女に会つてあげて」

美雨はそういつて僕の胸に手を当てると何かを手にとってその姿をあっさりと消したのだった。だが、最後に彼女の声が聞こえた。

「……じゃあね、時雨君……」

それが直接僕に関係のないものだったとしても彼女は僕を恨んで“いた”のだ。

第八話：”いた”は過去形今は違う（後書き）

前書きで言ったとおり重大発表なのですが・・・この作品に漠然とした不安を感じた作者雨月は「この作品は本当にコメディイなのか？」という疑念を抱いたためにこれを否定するようなことたとえば「いえ、あなたが書いているこの小説は充分コメディイです」と言う人がいたら続けたいと思っています。なんとなく、わがままですが自身がないためにこのようなことになってしまいました！すいません！あ、ちなみにもしもこの作品が終わってしまったら一時期書いていた「消去天使クリア」を連載したいと思っていますが・・・どうなるかはまだわかりません。

## 第九話：写真は消えない／第一章 名のない章の終わり（前書き）

「作者の脳内小説メーカー」え、初めに申しておきますが、存続が今のところ決定しています！皆さん、今後もよろしくお願いします！」「この章を終わらせたらコメディ要素をもっと多くいれたいと思います。」「評価と指摘してくださった」とも”さん、ありがとうございます！」



## 第九話：写真は消えない／第一章 名のない章の終わり

私になんか用かね？

……ああ、美雨がいなくなったから今回は私に仕切って欲しいのか？この生徒会長に？

………そこまで言うなら・・・では、行こうか？

確かに、美雨は時雨の目の前から消えた

だが、それは彼の“目”に映らなくなっただけかもしれない

彼女が言うように本当に消えたのかもしれない

既に時雨が立っている島には彼以外に人はいない

全て、夢の中の出来事としてそれぞれが朝を迎えるだろう

しかし、彼にはまだ、この島に用事がある

………この島に美雨と同じく、縛られているだろう彼の本当の父親を探すために………

九、

「あゝ月が綺麗だ」

僕は夜空を見上げていた。

今では無人島となってしまったこの島に一人でいるのだから・・・いや、僕がいるから無人島じゃないな・・・だが、僕以外の人物は

確かにいないのだ。美雨が消えた時点でこの島に見て取れるほどの変化が訪れた。それは、桜の花が舞い散るように普通なこと、消えていく建物を見てもおかしくも何とも自分が感じずに気がつけば桜の木が一本、生えている気の根元に僕一人が立っていた。

先ほどまで僕の目の前にいたはずの美雨という少女の姿もない。

それに、校舎が消えたので剣治たちの姿を探してみたのだが、彼らの姿も当になかった。見えるとしたら桜の木が生えている丘の上から見えるものはもう一つ反対側の丘に生えているここに生えている桜の気よりも一回りほど大きな桜の木だけだろうか？あの大きな桜の木は何やらおかしく感じられる・・・なぜなら・・・

「まあ、世の中には光る竹はあったとしても光る桜の木はないよね？」

一人で呟きながら、涙の跡をぬぐいながら・・・僕は立ち上がった。その大きな桜の木を指して歩き出したのだ。何故、僕だけがこの場所に残ってしまったのかわからないのだが、先ほどの不思議少女美雨のせいだと思われる。もっとも、その不思議少女が姿を消してしまったのでもはや尋ねることが出来ないのだ。

星満点の夜空を一人で満喫しながら

「さて、こんな星空を見たのはいつが最後だったのかな？」と再び呟きながら僕はただひたすらに歩く。

「こっちの桜の木が美雨だったとしたら・・・過去にここで美雨の“能力”をどうにかする実験か何か知らないけどそれに巻き込まれたのは美雨に僕、そして・・・僕の父さんだろう・・・憶測だけど、あの桜の木は・・・」

いつの間にかゆっくりと歩いていたはずの僕の足は月に照らされた野原を駆けていた。バランスが崩れても、一度こけたとしても・・・途中バナナの皮を踏んでしまったとしても、僕は走った。

たどり着いたその桜の木は見事に輝いていた。

「父さん・・・」

「おいおい、桜の木に話しかけるちよつと危なそうな高校生だと思つたら俺の子供かよ……」

桜の木は光をさらに放ち、目を離れた隙にそれは人の姿にきちんとなつていた。

「よお、何年ぶりだ？」

そこに現れたのは白衣を着ている男の人……写真でしか見たことの無い僕の父親だった。その人は写真の中と同じようにひげをそらずにそのままどことなくだらしない格好の人だった。

「父さん……」

「さつきからそれしか言つてないぞ？美雨とあつたみたいだし……まあ、どうやら彼女も救われた……いや、それはいいや。ところで、どうした？目から塩分を含んでいられると思われる鼻水が流れているぞ？」

そうやって小ばかにしたように笑う父さん。父さんを知る人は

「ああ、あいつはよく人をからかってたな……ああ、そういや、とても適当な人物だった」といつていた。

「おっと、無駄に力を消費した拳句に美雨が木じゃないからな……まあ、感動的再開をいままらせんでも構わないだろう？お前は男だ、泣くんじやないぞ？それで、俺が見事に失敗した実験と思われていることについて何か聞きたいことは？」

一瞬だけ苦笑しながら父さんはそんなことを聞いてくる。

「……美雨は救われたの？」

「あゝそれはまあ、救われたかどうかは知らん。あとはお前がどうにかしたと思ったときにどうにかすればいいんじゃないか？」

とても適当な答えが返ってきた。生前とちつとも変わっていないのだろう。

「ど、どうすればいいの？」

「残念だが、俺は一つだけ質問を受け付けるといったんだぞ？男に二言はねえ……ま、中途半端で時雨には迷惑をかけてるって思ってるんだが……そろそろ時間がきたもんだからよお……」

父さんの目に涙はない。だが、その目が何かを必死にこらえていることを僕は知っている。

「・・・・・・・・すっかり生きろよ？あゝたまには墓参りに来てくれよ？・・・・・・・・じゃあな・・・・・・・・」

そういつて父さんはまるで霧が晴れるように消えていった。その顔はニコリともせず、僕をただただ、じっと見ているだけだった。

「さよなら・・・・・・・・」

僕はそういつて意識を失った。

「おゝい、兄さん！」

ある晴れた月曜日・・・・・・・・

「ふわ・・・・・・・・あ、蕾・・・・・・・・」

僕の義妹である蕾が僕を起こしにやってきた。

「ほら、姉さんも既に仕事に行ってるよ！」

どうやら僕の義姉さんもすでに仕事にいつているようだ・・・

「おはよう、なんだかさあ・・・蕾の顔を見るの久しぶりなんだけど？まあ、改めてみると可愛い顔してるね・・・・・・・・」

僕はぼさつとして蕾の顔を見る。

「・・・・・・・・あ、え、な、何言ってるの？」

「はは、どうかしちやったみたいだ・・・さ、急いで学校行かないと遅刻なんだよね？」

僕はさっさと立ち上がって部屋に薙を残してその場を去った。

朝食は軽めのもの（ばなな）をとり首を軽く回して鞆を引っつかみ玄関で待っている薙の元へと向かう。

「・・・さ、行こうか？」

「うん・・・じゃ、行ってきます、父さん」

奥の部屋においてある僕の“昔”の父さんに挨拶をする。

「・・・ねえ、兄さんは兄さんの父さんが行方不明のままがいい？」

登校中、薙はそんなことを尋ねてきた。

「うーん、ま、見つかってないからねえ・・・今頃どっかで僕らをみて笑ってるよ。間違いなくね・・・」

僕はそいつって青空を眺める。そこに広がるのは星なんて見えないう青空だ。そして、隣に立っているのは薙だ。

「ねえ、本当に今日の兄さんどうしたの？エッチな本を見すぎたとか？」

再び聞いてくる薙のおでこにデコピンをする。

「あいたっ！」

「そんなんじゃないよ、ちょっと変な夢を見ただけさ・・・」

「変な夢？」

「うん・・・」

「おや、君もかい？実は私もなんだ・・・」

そういつて僕の隣にいつの間にか立っている剣治に蕾は驚きながらも僕らは登校を続ける。ふざけたことを言って笑いながらも僕らは学校へと向かう。

さて、家に帰ったら久しぶりに父さんの写真の近くを掃除でもしたほうがいいのかもしれない。そうしないと化けて出てきそうだから・・・

第九話：写真は消えない／第一章 名のない章の終わり（後書き）

さて、前書きにも言ったとおりこの小説をコメディで続けていき  
たいと思います。

第十話：”能力”と”器”の特別授業（前書き）

「作者の脳内小説メーカー」今回はかねてより理解不能だった”能力”を中心とした話です」「これでもわからない・・・という人がいたら教えていただけるともっと詳しく説明したいと思っていますので、遠慮せずに教えてくださいね」「ああ、先輩、俺、一つ質問があるんですけど・・・」「なんだ？」「小学校でならった算数とかは使うのは計算するのに必要なのは知っているんですけど、中学や高校で使う内容は社会人になっていつ使うんですか？」「・・・」「そりゃ、あれだ・・・自分の息子とかに教えるために習うんだよ！」「・・・ああ、なるほど・・・」



## 第十話：“能力”と“器”の特別授業

では、今日はこの世界について授業を行いたいと思います

・質問がある人のみ、手をあげてください。あ、ちなみに手をあげる人が誰もいなければ一人一人点数を下げていきますのでそのところは自分でよく考えてくださいね。

はいっ、ではとてもいい返事が聞こえてきたようなので授業を続けていきたいと思います。

さて、この中に授業が終わるまで点数が残っている人が何人いるでしょうかね

十、

間違いなく先生の執権乱用で始まったこの生き残りをかけた謎の授業……先生と目が合ってしまったら負けだ……先生と目があつたら……

二コリ

「……先生、質問があります！」

「はい、一番手は村雨時雨君ですね？どうぞ、質問してください」  
条件反射で手をあげたのはいいのだが、困ったことに何も考えていなかった。な、何か頭の中に……いや、隅っこでもいいから適当に思いつくものを片っ端から言葉に乗せて先生に送ればこのばを凌ぐ事は可能に違いない。辺りの皆が無言のエールを送ってくれているのはわかるのだが、そのエールが

「お前と過ごした一年間……来年、下級生になっても俺たちは友

達だ・・・」というエールではないエールなのが頭にくる・・・

「・・・そもそも、“能力”って何ですか？」

「いい質問ですね」

そういつて先生はとても上手に一つのコップを描いた。

「・・・はい、まずは基本からいきたいと思いますが・・・皆さんはそれぞれが所持している“能力”を使うことが出来ますね？」

まるで小学生低学年に聞くような感じで先生が聞いたためにあつというまに教室内は静かになってしまった。

「はい、出席番号十二番の君、先生に対してがん付けを決行したのでマイナス二点ですね 小さい点数だと思わないでください、まだ授業が始まって五分も始まっていませんからね さ、皆さん返事は？」

「・・・はい」

その返事に先生は満足してうんと頷くと黒板に描かれているコップの右上辺りに夜間の絵をかいた。

「・・・それで、このやかんの中の水が皆がつかっている“能力”だと思ってください。あ、ちなみに“能力”は皆さんの体が成長していくごとに小さいですが強さを増していくといわれていますよ。さて、このやかんの水をコップに注ぐと、どこまで注ぐことが出来ますか？」

僕に笑顔を見せながらたずねてくる先生（たぶん二十三歳ほど？）は

「さあ、点数を減らされたくないのなら答えてみなさい」とまちがいなく思っているだろう。

「あゝそのコップのぎりぎりまで注ぐことが出来ると思います」

「そうですね、それであってます・・・さて、このコップを君たちだとすると注がれている“能力”は個々で限界があるということですよ。酸素が地球が始まった当初、生物にとって毒であったと同時にこの“能力”も我々にとっては毒だったのです。ですが、進化の過程で“能力”という液体を支えるためのコップとなる“器”が形成

されたのです。あ、ちなみに“器”は一般の人には見られないのでそんなに目を皿にしても君たちには見つけることが出来ないの馬鹿みたいに探さないで授業の邪魔をしないでくださいね　さて、“器”の説明をまとめると、個々によってその大きさが違う！ということですね。この後に説明する“能力”についても補足説明をしますのでよく聞いておいてください。では、村雨時雨君が言っていた“能力”とは何か・・・先ほど比喻で液体といましたが、このやかんの中の水を限界以上にコップに注ぐとどうなるでしょう？剣山剣治君、説明してください」

「私はそのコップの材質のほうを聞きたいと思います！」

「・・・はいっ、授業を邪魔するような質問はマイナス五点です。ちなみに、彼の質問に答えるはこのコップはチョークと黒板で形成されています。さて、このコップに限界以上の水を注ぐと当然のようにコップからあふれてこぼれてしまいますね。こうなってしまう人もいると聞いています。こうなる確率は非常に低いのですが、なってしまうととても危険です。まず、そうなる危険性をかきたいと思います」

そういつて元からかかれていたコップの隣にもう一つのコップを書く。それは小さいものだった。

「・・・生まれてきた中には元からこのようにコップ・・・つまり“器”が小さい人もいます。もしもそれに注がれる水・・・“能力”が限界点を越えてしまうとコップからこぼれてコップを覆ってしまいますね？先に告げておきますが、このコップは紙で作られたものだと仮定します。ずっと水につけられていたら当然、とけてしまいます。そうすれば能力は一気に解放されて、辺りに散らばってしまいます・・・いずれ水・・・“能力”は蒸発して消えてしまいますが・・・ここで他の人コップを近くに持ってきます。そしてこのようにひしゃくなどでその水を掬ってコップに入れるとどうなるでしょう？このとき、近くに持ってきたほうのコップにはほとんど水が入っていないと仮定しましょう・・・さて、どうなるでしょう

うか？村雨時雨君、答えてください」

「えーっと、こぼれてしまった水が他人のコップの限界点まで入るということですか？」

「はい、その通りですね。そうすれば、紙コップもずっと濡れることなく、長生きすることが出来るでしょうね　・・・ですが、この方法は間違ったら受けて側の紙コップも同じように濡れて双方駄目になる可能性があるので気をつけましょう！」

そういつて親指をなぜだか僕にぐっと突きつける先生だった。

「さて、ここから確信的な説明をしていきたいと思います。まず、一人の人間がこの状態に陥ってさらに、失敗してしまいます。そうすると、その人間は壊れてしまいそうだが、まだ形を保っている紙コップという状態を形成します。さて、そのよれよれの紙コップに何らかの刺激を与えるとどうなるでしょうか？見事にその紙コップは崩れて中に入っていた水はこぼれてしまいます。ここで実際のところは終わりなのですが、世の中には色々と面白いことがあります・・・ここでこのぼろぼろになったコップを隣にある丈夫なコップに入れるとどうなるでしょう？ああ、ちなみにこのコップは特別製のもので水では濡れても壊れないということにしておきます。まだこのコップには要領がありますので、当然、紙コップはこの大きなコップの中でぼろぼろながらもその形を保つことが出来ます。これを先ほどの人間に置き換えるとぼろぼろになってしまった人間でも誰か、自分と“能力”を受け入れるほどの“器”を持った人がいれば助かるということになりますね　受け入れる側のメリットとして自分と違う“能力”の人ならばその人の“能力”を使うことが出来ますし、同じ“能力”ならばより強力な“能力”を使うことが出来ます。え？何故かって？それは1+1を足すと2になるのと同じことですよ。ああ、言い忘れていましたが飽和の状態から紙コップの形を形成している間の状態を私たちは“能力の固まり”と呼んでいます。この状態ならば人とも話せますし、その人物も自ら刺激を与えない限りは半永久的にその場にいることができます。まあ、お化けって言っ

ても間違いいではないと思います。それと、中には近くに生えている桜の木に意思が移って化け桜と呼ばれるものも世界にあるそうですよ。」

そういつて先生は黒板に書かれていたものを消していった。

「さ、他に何か質問はありませんか？」

生徒を値踏みするような視線を送って今度は何を求めるのだろうか？

「せんせゝ質問いいですか？」

一人の女子生徒が先生に尋ねる。

「はい、つるぎやまあみ 剣山亜末さん。何でしょう？」

「せんせゝは時雨君の質問を受けたときに“能力”は小さいが成長していくって言っていたんですけど・・・それならいずれ私たちは全員“能力”があふれてしまふんじゃないんですか？」

その指摘に先生は方眉を上げながらもせきをして亜末さんのほうを見る。ちなみに亜末さんは剣治の親戚との話である。詳しい紹介は今度したいなあゝ

「はい、どうやらこれは私の説明ミスのようなですね。“能力”が成長するようにきちんと“器”も若干“能力”よりも大きく成長します。よって、基本的に“能力”があふれ出すようなことはありませゝん。中には他人の“能力”を移しているという人でも、移す前の人の“器”を少しでも持つているのなら心配しなくて結構です。さて、どうやらそろそろ授業を終了させてしまふチャイムが絶妙なタイミングで鳴りそうなので、今日の授業はここらで終わりにしようと思いますか・・・どうしましようか？」

先生がそう尋ねるとひとりの生徒が手をあげた。

「その意見には賛成です！」

「はい、君は剣治君と同じようにマイナス5点×2ですねゝ」

「え！？私がいつ先生の気に触るようなことをしました？」

先生が言ったとおりここで・・・

キンコーンカーンコーン

絶妙なタイミングでチャイムが教室へと鳴り響いた。

「さて、最後に言い残しておきますがまたなにかわからないことがあつたら聞いてくださいね？先生は場所、時、場の空気を読まずに現れる生徒の味方です。言ってくれば詳しく説明してあげますからね。」

そうやって先生は去っていった。残された生徒は

「ようやく嵐が消えた。よかったよかった」と顔にかかっている。無論、僕もその中の一人だ。

「いや、本当に今回の授業は皆を貶めようとしている教師側の魂胆なのではないか？」

剣治はとても難しい顔をしながら僕にそんなことを尋ねてくるが、そんなことを僕が知っている立場でもないのだ。知るはずがない。

「時雨君、しかしまあ・・・君があんなことを聞かなければ私は点数を減点されることなどなかったのだよ？わかっているのかね？」

「その責任転嫁はどうかと思うけど・・・」

メガネを意味もなく光らせながら近づいてくる剣治を脇にどかしながらこれからどうしたものだろうかと思いつながらとも思考をめぐらせる。

「ああ、そういえば今日は生徒会の雑用係が休みだったな・・・時雨君、ぜひとも生徒会に来て一緒に仕事をしてくれないかい？」

剣治が態度をころっと変えてそうたずねてくる。

「いや、どう見ても一緒じゃなくて僕だけじゃない？その仕事・・・」

「気のせいだ・・・彼女もいないし部活も入っていないやつを雑用に使って何が悪いんだ・・・おっと、今のは気の迷いだからな。決して本心が出たというわけではない」

さわやかに笑って僕に返事を待っているようだったのだが、僕は

同じように笑いながら彼に水鉄砲（僕が得意としている技）を浴びせてグッバイ！

「さ、これからどうなるんだろうねえ・・・」

後ろから追いかけてきている剣治をどのようにまこうか考えている放課後だった。

第十話：”能力”と”器”の特別授業（後書き）

どうだったでしょうか？これでおおかたのこの世界のことについて少しは理解いただけたと思うのですが・・・。まあ、このままでは自己満足で終わってしまう可能性がありますので、わからない人がいたら教えてください。そのときはまた、名前の決まっていない先生を自己紹介と共に再び登場させて説明してもらうつことになっていますので、よろしくお願いしますね。



## 第十一話：カイコウ

世の中というものは運命というものがあるのかもしれない。

いや、意外とないのかも……

今日も私は私宛の手紙……“風馬家”の手紙を手取る。

さて、今日はどのような相手に争うことのむなしさを教えればいいのだろう？

戦いといえば、この前おかしな夢を見た。

普段は一人で戦う私の隣にそのときは誰かが立っていた気が……

……私宛の手紙の中身は“水の一族の偵察”だった……

十一、

世の中というものはわからないものである。僕は今、“一族”の最高権力者である長老様のもとへと連れてこられた。

「村雨時雨、村雨薔をつれてきました」

「うむ、ご苦労……」

「……」

隣に立っているのは僕の義妹と僕らに連絡をしてここまで車で送ってくれた人がよさそうで誰からも利用されそうな男性だった。

「じゃ、二人とも……おじさんは門のところで待ってるから……」

そそくさと逃げるようにして僕らの前から姿を消すおじさん。その姿がまさしく

「この長老のところにいるといいことはない」と語っている。事実、この長老さんの噂は非常に黒いものとなっている。気に食わなければその相手がどのようなものであっても“一族”の名簿から消されているとの噂なのだ。挨拶の声が小さいだけでも島流しにあった人もいる。ここは慎重に行かなくては、僕と義妹の行く末はよろしくないのかもしれない。

「兄さん、私たちどうなっちゃうのかな？」

そうやって小声で僕に話しかけてくる義妹・・・不安なのだろうか？顔が真っ青だ。

村雨蕾・・・水を操る“一族”の一つ、村雨家の次女として生まれた女の子である。

小さい頃はよく色々としたものだなあ、おしめかえたり、おねしょをした後の布団の始末と変わり身・・・あのとき、怒られたのは僕なんだけだなあ・・・そんで、今は高校二年生である僕より一つ年下家族としては僕が兄貴でもう一人、姉さんがいる。好きな物は甘いものと体を動かすもので嫌いなものは苦いものと怖いものだ。幼い顔立ちと体つきで実年齢よりも下に見られてしまうことがあるのでそこをコンプレックスとしているらしい。詳しく聞いたことがないからわからんが・・・剣治曰く

「ああ、蕾ちゃん？まあ、時雨君の義妹にはちようどいいんじゃない？あ、彼女にしたいかって？そりゃないね 私には心に決めた人があるんだ。残念ながらおままごとの相手は遠慮しておくよ」とのなんだが非常に腹立たしくも的確な指示を得ている。

「蕾よ、そろそろ“一族”を束ねる当主としての自覚を持ってきたか？」

いきなり話し始めた目の前のおじいさん。何故か知らないが右目に眼帯をしているところを見ると非常におそろしい雰囲気をかもち出してくれている。

「あ、は、はいっ！」

「自信はあるか？」

「な、ないですけど・・・兄さんとかに手伝ってもらって皆をまとめていきたいと思ってます！」

隣に立つ僕としては

「え、マジ！？そんなのいつ決めたっけ？」と思ったのだが、ここでそんなことを言ったらいいことなさそうだ。

「ほお、兄貴を頼りにしていると？」

白々しそうにそんなことを言い始める長老・・・さて、この人は何歳なのだろうか？

「ええ、頼りにしてます！どんなときでも助けしてくれるに違いありません！」

力説してそんなことを言っているのだが、僕としては実力以上のことをするのは出来ないと思うのだが・・・そのところはどうでしょう？ 蕾さん？

蕾は非常に顔を赤くしながらもがんばっている・・・いや、お兄ちゃんとしてはそこまで言われると引こうにもひけないところが・・・もう、こうなったらひくんじゃなくて押したほうがいいのか？  
「ふうむ、時雨は構わんと思っっているのか？」

「え、あ・・・」

「彼女が出来たとしても妹のお守り・・・お前に出来るのか？」  
「あゝがんばります」

ここは曖昧に答えて自分の首をつなげておいたほうがよさそうだ。  
「そうか、それなら構わんが・・・今回、蕾に時雨を呼んだのは他でもない、お前たちは“風馬家”を知っているか？」

どこかで聞いた名前だな・・・どこだったかな？

「時雨は知らんかもしれないが、蕾は答えられるだろう？」

「はい、ええと、争いを起こしたら報酬をどこからもらって争いを止めるって人たちですよ？どこの“一族”にも属してないけど、もとは“風を使う一族”だと聞いてますけど？戦って残った人たち

はいないとか・・・それがどうかしたんですか？」

知らないことに越したことはないような内容だ・・・なんて危ない人たちなんだ？」

「どうやら、その“風馬家”に目をつけられたらしい」

「誰がですか？」

薔がそんなのんきなことを言っている。そして、僕は冷や汗が流れ始めているのを感じている。

「・・・お前たちだ・・・」

「ほら来た！・・・あ、いえ・・・なんでもありません」

非常に恥ずかしい思いをしながら、下を向いて反省のポーズ。

「・・・あの、それでなんで狙われているんですか？」

「さあな・・・まあ、襲われる可能性があるのはお前たちが登校中か、下校中・・・両方とも部活にはいつていないそうだが・・・」

そこで一旦話をきつてため息をつく。ああ、そういえば僕らの“一族”とかには目の前のおじいさんみたいな人を守るための“ぼでいゝがゝど”がいるんだった。もしかしたら僕らを助けてくれるのかも！

淡い期待と共におじいさんの一言を待っていると・・・

「はあ・・・悪いがお前たち二人に護衛をつけることが出来ないんだ」

淡い期待はやはり、淡い期待でがつくりとうなだれる僕の姿を誰かが見たら

「リストラされたサラリーマンみたいだ」というに違いないだろう。

「まあ、次期当主とその兄貴だ・・・なんとかなるだろう。お前たちの家族には既に伝えてあるから、家に帰ってたずねてみるとよい」

そういつて僕らに

「気を張り詰めてがんばるように」といっただけで僕らは退出するように言われたのだった。

「ねえ、どうしようか？」

「どうするも何も……」

長い長い日本庭園を歩きながら二人で今後の予定を話し合ったのだが、どうなるものでもないのだ。

「しかしまあ、変なのに目をつけられたってことだね？」

「ある意味、ストーカーよりたちが悪い相手だよ……蕾、なんとななるって思ukai？」

「うーん、襲われるとしたら……」

さて、僕と蕾、どっちが襲われる可能性が高いだろうか？僕ら二人は結局答えを見つけることが出来ないまま、その日は静かに終わってしまったのだった。

次の日、いつものように学校に行くと男子たちが騒がしかった。

いや、クラス全体がうるさいものだった。

「ねえ、どうかしたの？」

「ああ、時雨君か……実は今日、このクラスに転校生がやってくるそうだ……昨日、校長先生から教えられてね……麗しの美少女だとの目撃情報があるんだ」

「へえ、それはすごいね……まあ、だから男子たちがやし立ててるのかな？だけど、僕らのクラスの男子はそろって彼女がいるだろ？」

そつたずねてみると、剣治はうんと頷いて……

「それだけじゃないんだよ。その転校してくる美少女がものすごく強いそうなんだ。一度手合わせ願いたいと思ってる連中がここには多いからだろうね……どうだい、時雨君も一度相手と手合わせしてみたら？」

「いや、僕は遠慮させてもらっておくよ。興味ないし……それより、この前借りてた本だけど……途中、破れてたよ？」

その後、僕らは他愛のない話しをして時間を過ごし、朝のHRとなつて皆が静かに机につくと、数分遅れで先生がやってきた。

「はい、皆！元気？」

「……」

いつものようにやってきた若手の先生に誰も無反応……

「むう、皆つれないなあ……そんなことじゃ先生、怒っちゃうぞ」

「……ぶつ、年考えろつての」

一人の生徒が先生の冗談ではない一言を笑ってしまった。

どがーん

一人の生徒（先ほど笑った人物）は足元からの爆発を受けて天井にのめりこんだ。

「あらら……ちよつと力加減を間違えちゃった てへっ」

ちなみに、その後続く言葉は

「天井どころか、屋上まで突き破ろうと考えただけだね」に違いないだろう。

さて、一人犠牲者が出てしまったのだが……まあ、それはいいや。

「先生、転校生はどうしたんですか？」

「あゝそうだった。今日やってきた転校生はとっても可愛い美少女よ 目をぎらぎらさせながら見てあげてね」

おいおい、この先生はどういう先生なのだろうか？まあ、この学校に集まってきたている連中もどこか頭の変わったところが多いからなあ……僕としてはその中にいて勉学に励んでいるのだが、このクラスは比較的まともなほうでよかったよかった。

「じゃ、入ってきてね」

扉を開けて一人の少女がやってきた。僕と剣治は同時に息を呑んで呟く。

「……か、風馬……美羽……！？」「」

「……目標、確認……」

彼女の瞳はとても冷たい（絶対零度？）輝きを放っていた。

外では誰かの声が聞こえたような気がした。

## 第十二話：彼女のやり方

世の中って言うのは自分の思い通りに行かない

そんなことは百も承知・・・

予報とは予想して報告すること・・・

だから、天気予報が外れても文句を言っではいけないのである

だけど、予測できるのは天気だけなんだろうか？

・・・人が人と出会うということは予測できないのだろうか？・・・

十二、

ものすごく冷たいオーラを纏った転校生、風馬美羽は昼休みとなつた今でも辺りに人を近寄らせることなく、やたらと僕のほうを見てきているのだ。しかも、ばれないように努力をしているのだろう。これが普通の転校生で美少女、さらに僕のことをちらちら見ているというのなら

「どうしたの？」と僕は彼女にお近づきするだろうが・・・近づくものはすべて冷風ではねかえすぞという意味を持った視線に誰も近づきたがったりしないだろう。根性を持った男子生徒たちはまるで蛇の王様であるバジリスクに睨まれたアマガエルと化していた。おせっかいな女子たちも黙ったままなので進展が無い。

唯一、彼女に普通に接しているのは先生ぐらいなものであり、先生はもとからそういう図太い性格なのだろうと噂されていた。

「剣治、彼女に話しかけないの？」



その先生とためを張ることができるのはこの男ぐらいなのだろうが、彼も珍しく動かなかった。

「ああ、面倒だから・・・」

「面倒!？」

「正直、あの風馬家を敵にするのは一族としては反対だと先ほどメルがきたんだよ。下手にちよっかいを出して一族を滅ぼすんじゃないぞといわれてしまった」

そういえば先ほど剣治が彼女のもとへということとして携帯が鳴り出したっけなあ?じゃ、このままでは彼女はこのクラスで孤立してしまうのではないのだろうか?うつむ、可哀想だなあ・・・と思いながらも動けないでいる自分を情けなく感じたのだが・・・

「・・・時雨・・・」

「?」

誰かが僕の名前を読んだ気がしたので剣治のほうを見ると首をふり、僕らよりも離れた場所で首をすくめて隠れるようにして身を寄せ合っている男子たちに視線を向けると首を振った。残りは美羽さんだけとなる。

「え、え〜つと・・・」

「・・・村雨時雨・・・」

気がつけば目の前に立っている美羽さん・・・この人が忍者だったらそれはもう、名に残るような忍者になっっていたに違いない。

「あ、な、何でしょう?」

「・・・誰かに校内を案内してもらえって先生に言われた・・・」

「え、ええと?」

助けを求めて剣治を見る。彼は死んだふりをしていた。

「う、うつんと・・・?」

今度は他の男子生徒に助けを求めてみたのだが・・・

「う・・・ど、毒を盛っていただと?」

「ブルータス、お前もか・・・」

「我が一生に一片の悔い無し!」

「ば、ばか・・・な・・・」

「戦いの中で戦いを忘れた！」

とそんなことを言いながらばたと倒れていく。裏切り者と白状者たちの死屍累々とした場所が出来上がってしまうのだった。

「・・・わ、わかったよ・・・」

僕は引きつりながらも微笑んで彼女と一緒に廊下に出たのだった。途中、廊下ですれ違った腕に確かな自身のある不良生徒たちも見事に死んだ真似をしている。彼女を熊か何かと勘違いしているのではないのだろうか？熊だったら死んだまねをしても意味がない。ちつ、普段はでかい面してる癖して結局それかよ！？無謀とわかっていながら突貫していく勇氣があるものがこの学校にはいないのか？

「えっとね、ここが音楽室・・・」

不良のたまり場の一つである音楽室・・・ここでは不良たちが常に占拠してコンクールに出てもいいのではないかというぐらいうまくピアノを弾いている。

演奏中にはいると

「集中がされるだろうが！」と相手が先生だろうとお構いなく切れる悪の中の悪？が揃っている場所でもある。ここなら、突貫してくる相手もいるに違いないと思ったのだが・・・

「だれだ？ごちゃごちゃと・・・この小娘か？」

美羽さんに手を出そうとした不良のその手が体ごとそのまま飛んでいってしまった。そして、そのままピアノを占領すると勝手に弾き始める。

演奏中

「？」

演奏が終了して（とばされていなかった不良たちは借りてきたねこのようだった）僕のほうに視線を向ける。

「・・・えと、何の曲？僕、知らないんだけど・・・」

話に合わせただけである。僕は曲に疎い

「・・・即興で弾いた。あえて題名をつけるなら“出会いに喜びを”・・・」

「そ、そうなんだ・・・」

「・・・」

弾まない会話に美羽さんの冷たい視線に加えて辺りの同情の視線（かわいそうに、寿命が縮まってるぜ、あの顔・・・という声が聞こえてくる）に顔に張り付いた恐怖を何とかはがしながら僕は彼女に続けた。

「屋上に行こう！」

「・・・」

「ま、また今度きちんと案内するから・・・ね？」

「・・・わかった・・・」

二人して屋上の扉を開けると強い風が僕らに吹きつけてきた。

「・・・いい風・・・」

彼女は屋上に出て体で風を感じているようだった。

「そうだね・・・」

僕も体に風を感じながら・・・それ以外、何も感じなかった。強風なのでグラウンドで女子たちがスカートをおさえているところを凝視しているだけである。

「・・・気が変わった・・・」

「何の？」

「・・・私はあなたを見たことがある・・・気がする」

「奇遇だねえ・・・僕もなんだ」

「・・・」

「嘘じゃないよ？」

なんとなく、疑っている気がする相手に僕は正直に告げる。

「夢の中なんだけどね・・・」

「なるほど、私も・・・」

二人して首を傾げるしかないのでさて、どうしたもんだろうかと思つたのだった。しかし、首をかしげている時間も短かった。

「ふふ・・・」

「はは・・・」

おかしくないのにお互いに笑い始めたのだった。

なんだか・・・なんだか非常にいい雰囲気じゃないか？女子とこんなに会話が進むなんて、妹以外で初めてではなからうか？

よ、よし・・・ここは勇気を振り絞って話をもつと続けることにしよう。

「ねえ、美羽さんって夢、ある？」

「夢？」

「うん、夢。ああ、夜見ている間に見るものじゃないよ？目標とか、そんなの」

「・・・いや、ないけど・・・時雨はあるの？」

「うん、あるよ？僕はね、悪の組織を立ち上げて人類の敵になることなんだ」

「・・・・・・」

「ばかだよねえっていわれるんだけどさ、いや、自分でも馬鹿だつて思つてるよ？まじめに考えている奴なんて一人もいないだろうに・・・おかしいよね？だけどさあ、僕は理由なんていいから、一度決めたことをやりとおしてみたいと思うんだ。変だつて構わない」

「・・・変。十分、変・・・けど、時雨がそいうのなら、私が・・・何とかしてあげる」

「え？」

聞き返そうとしたところで強風がいきなり吹きつけてきた。面食らつた僕はふらつとして、美羽さんから掴まれる・・・と、必要以上に相手が力をこめて僕を引っ張つたので僕は彼女のほうに体重を掛けてしまった。

「んぐ!？」

何が起こったのかわからない僕だったが……美羽さんは笑っていた。

「……人類の敵になるのもいいけど……世界の救世主になつてはくれない？」

「え？」

何を相手が言い出したのか僕にはわからなかったのだが……相手、美羽さんは真剣な表情をしていた。

「せっかく、友達になれたと思っただけど……私の友達なら救ってくれる。必ず。だから、また会いましょう？」

「………？」

彼女は強風を一気に体に纏った。空でも飛ぶのだろうかと思っただが……なんと、気がつけば浮いているのは僕のほうだったのだ。そして、だんだんと地上が遠くになっていくにつれ、普通の人だったら

「おろせえ！」とか叫ぶのだろうか……

「うはっ……」

あいにく、僕は高所恐怖症だったために見事に気絶。その後、自分がどこに行ったのかわからなかった。

「……任務、失敗。けどまあ、私も彼を追いかける……」  
美羽は教室からくすねてきたチョークを使って屋上に書き残したのだった。

時雨はどこにいったのだろうか？行方不明となった彼に対し、周りは

「とうとう奴は悪の組織を立ち上げるために資金を求めにいったのか？」と半ば本当に考えられたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8824c/>

---

人類の・・・ ～僕のやり方～

2010年10月8日15時50分発行